

昭和二年十月廿五日第三刷郵便物  
昭和六年五月卅一日印刷  
昭和六年六月一日發行  
(一月一日)

向瓶ノ子三

分

六六

年月

号

透瓶城

横ノ子三





射しつゝのる陽差まばゆし

夏の御用意には  
何卒大丸へ

月曜休業◇夜間営業



大丸

大阪心齋橋

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽  
喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

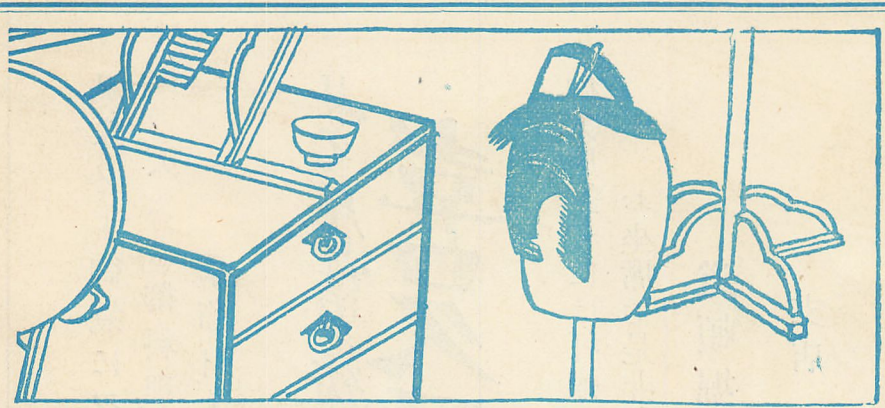
道頓堀戎ざし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町

京都支店 木屋町ドングリ橋





道 頓 堀 昭和六年六月號 第六年 第五十七輯

□ 中座の大歌舞伎◇「色彩間苜豆」尾上梅幸のかさね◇市村羽左衛門の與右衛門◇同舞臺面のいろいろ・市村羽左衛門の與右衛門・尾上梅幸のかさね◇義經千本櫻」松本幸四郎の知盛◇「素襖落」林長三郎の鈍太郎・松本幸四郎の太郎冠者◇「異話情浮名横櫓」市村羽左衛門の向疵の與三◇「玄治店の舞臺面」尾上梅幸のお富・松本幸四郎の多左衛門・市村羽左衛門の向疵の與三◇市村羽左衛門の伊豆屋與三郎・尾上梅幸の妾お富◇「奴道成寺」・舞臺面・松本幸四郎の狂言師左近◇「文樂座人形淨瑠璃」◇「義士銘々傳」赤兵出立の段◇「御所櫻堀川夜討」辨慶上使の段◇「加賀見山舊錦繪」長局の段◇「紙子仕立兩面鑑」大文字屋の段◇「角座の新聲劇」◇「巷説釣天井」中田正造の本多上野介・波多謙の忠長・伊川八郎の安藤大學・辻野良一の大工與四郎・澤井光代のおまき・福岡君子のお早◇「女性の叫び」山口俊雄の船員次郎・小松孝子の春子富士野葛枝の蘭子・芝田新のジョツカー◇「浪花座の家庭劇」◇「お祖母さん」十吾のおきん・十次郎の源兵衛◇「検査済」如月武子の由子・三樂の安造・天外の三浦◇「新妻盛衰記」春野音羽の廣子・守住菊子の初子・十吾の彌七◇「お骨の居候」小織桂一郎の黒田良輔・十吾の貞二郎春野音羽のお秀・石井薫の濱男◇「京南座の市川左團次一座」◇「鳥邊山心中」市川松萬のお染・市川左團次の半九郎◇「大杯鷗酒戰強者」市川左團次の足輕才助◇「至町御所市川松萬の娘多門」至町御所市川左團次の池田丹後將武・市川壽美藏の足利義輝◇「神戸松竹劇」場の河合・喜多村顔合せ興行」◇「新景累ヶ淵」藤村秀夫の新吉・喜多村縁郎の豊志賀・東愛子のお久◇「假名屋小梅」河合武雄の小梅・都築文男の銀之助・石川薫の蝶次

□ 東西松竹合併と鴈治郎東上……………日比繁治郎 (二)

色彩間苜豆……………倉田啓明 (五)

聴く「かさね」観る「かさね」……………高谷伸 (六)

「かさね」ごその一家……………高安吸江 (八)

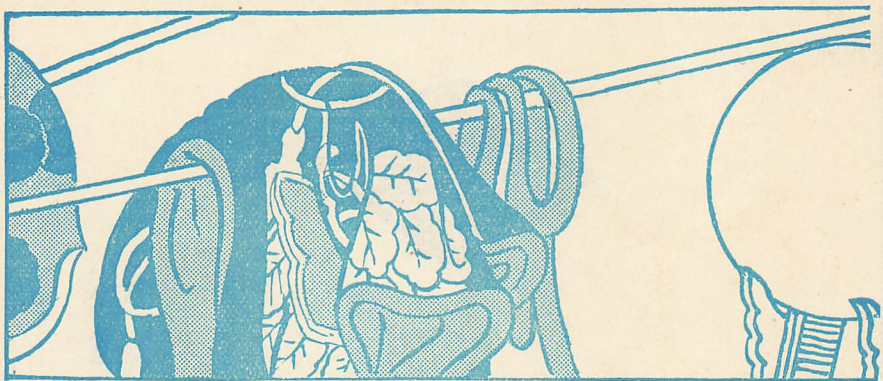
「かさね」の實説……………三木八十八 (二〇)

「かさね」ご道成寺……………西尾福三郎 (二三)

浅草を語る……………寺井龍男 (二六)

京のたより……………桂田曉香 (二八)

證考 「ねさか」



讚考

「玄治店」漫談……………瀨川春郎 (二〇)  
 人格の藝術……………華水生 (三〇)  
 『室町御所』と『鳥邊山』……………岡本綺堂 (三二)

見またおほむ石

義經千本櫻……………中座六月上場 (一八)  
 與話情浮名横櫛……………同 (二二)  
 素襖落……………同 (二六)  
 奴道成寺……………同 (二七)  
 巷説釣天井……………角座新聲劇上場 (三三)

海外特輯消息

漫談 歐米の旅……………筒井徳二郎 (四二)  
 蝶々夫人を観る……………伯林より好劇子 (四六)

◆彼女の顔彼の顔……………尾上菊枝 (三六)  
 ◆大谷しも刀白…………… (四九)  
 ◆故岡田伊三次郎…………… (一三)  
 ◆劇壇時事…………… (三八)  
 ◆劇壇往來…………… (四〇)  
 ◆喫煙室…………… (五〇)  
 ◇編輯後記……………  
 ◇挿繪……………田中満彦



小道具  
裂具  
貸衣裳

- ・素人演藝會・宴會の催物。
- ・春秋温習會・婚禮の衣裳。

松竹衣裳部

本店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内  
電話 戎 五 六 三 四 番

東京支店

東京市淺草區並木町十五  
番 電話 淺草 五 五 九 九 番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい、  
御來客の御相談に應じ便利よく取計ひます)

證券金銀



有價證券賣買

株式會社

本店

支店

日本信託銀行

大阪市東區今橋二丁目

電話本局 自五二二〇番 至五二三五番

振替口座大阪 五四二五〇番  
發信略號 シン

東京市日本橋區南茅場町

電話茅場町 四四四四番 四四四五番 四四五六番

振替口座東京 五六〇九〇番  
發信略號 シン

どなたにも使ひ易いベスト判

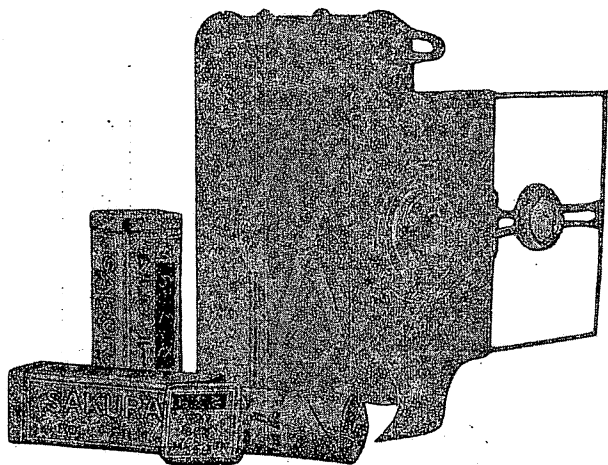
### パーレットカメラ

十七圓 廿五圓

### さくらフイルム

ベスト判四十五錢 名刺。五十錢

其他各判有り

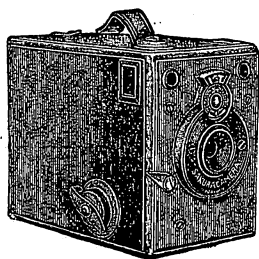


十六ミリ映畫の霸王

### サクラグラフ

百呎十圓

新巻賠償發賣



お子達向のベスト判

### さくらカメラ

三圓五十錢

(各地寫真材料店百貨店に有り)

ソアラダクサ

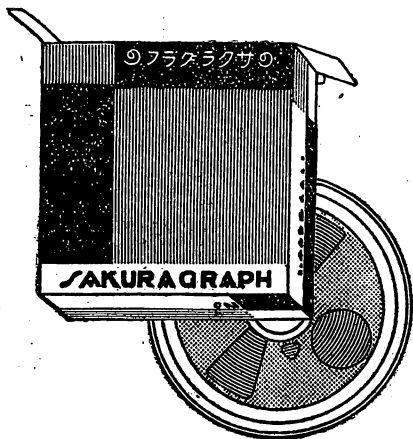
SAKURAGRAPH

(カタログ進呈)

寫真機械及小型活動寫真機

## 小西六大阪支店

大阪市長堀橋筋







幸梅上尾 ねさか [豆 苜 間 彩 色 ねさか] 幕中 【伎舞歌大の座中】  
門衛右輿



門衛左羽村市 門衛右與 [豆 苜 間 彩 色 ね さ か] 幕中 【伎舞歌大の座中】  
門衛右與

【中座の大歌舞伎】

中幕  
「かさ衛門 色彩間 莉豆」

舞台面のいろく

かさ衛門

市村羽左衛門  
上梅幸



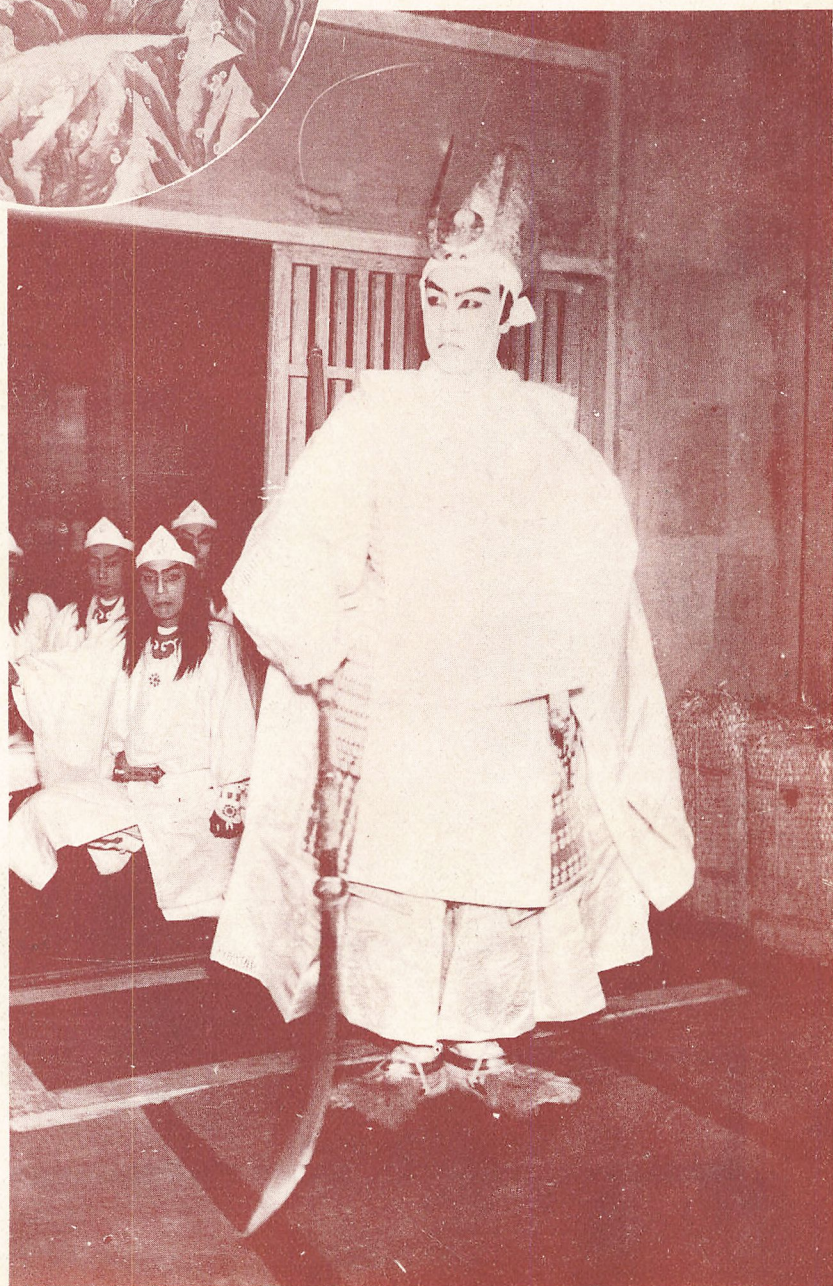
【伎舞歌大の座中】



一番目 「義經千本櫻」

平知盛

松本幸四郎



罐切いらぬ

# 牛肉寶來煮

株 松 下 商 店  
大 阪 ・ 高 麗 橋

海行かば

海へ…

山行かば

山へ…

味覺のお伴

美味と滋養

牛肉寶來煮





# プロシイルマ

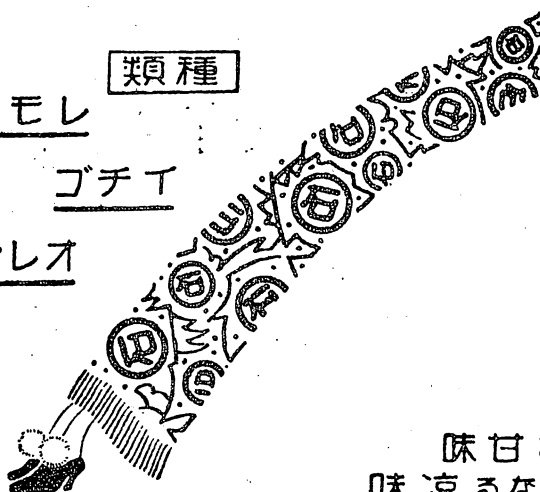
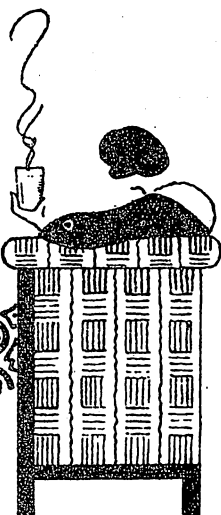
一杯一杯と清涼飲料の素

種類

ンモレ

ゴチイ

ヂンレオ



卓越せざる甘味  
爽快なる涼味

大阪東区淡路二丁目  
丸石製薬合居社  
徳本局 一六七 四六八

【中座の大歌舞伎】

新歌舞伎  
十八番の内「素襖落」



大持刀鈍太郎 林三郎



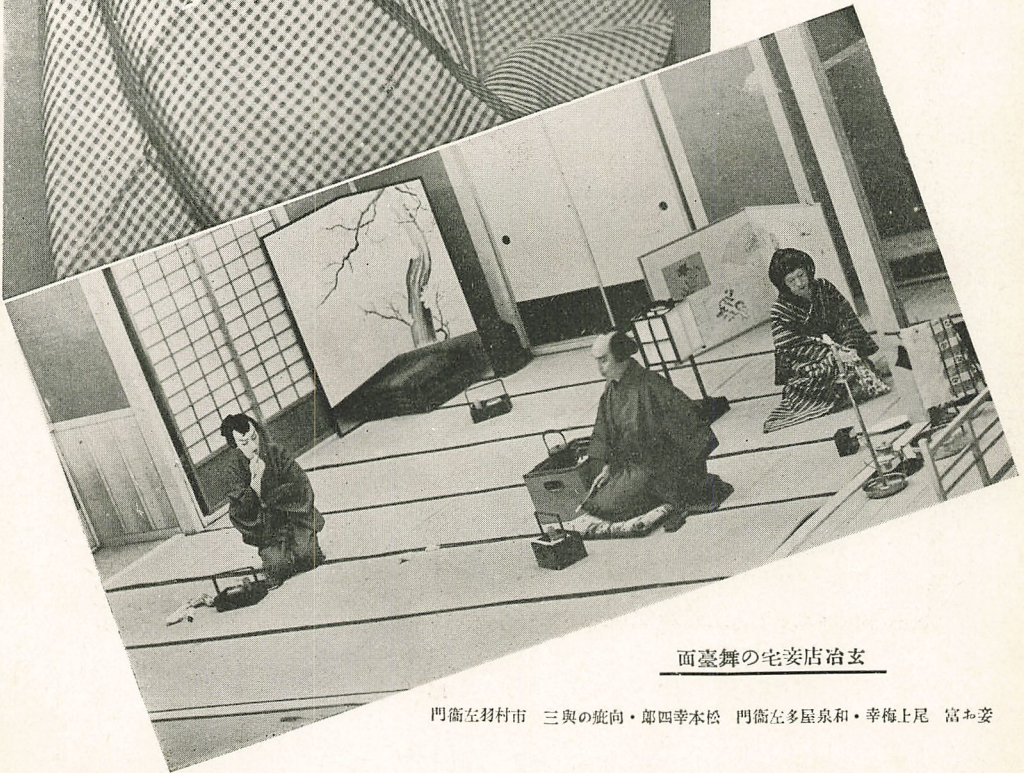
太郎冠者  
松本幸四郎

【中座の大歌舞伎】

二番目「與話情浮名横櫛」

向疵の興三

市村羽左衛門



面臺舞の宅妾治玄

門衛左羽村市 三與の疵向・郎四幸本松 門衛左多屋泉和・幸梅上尾 富お妾



高貴藥

Neclejin  
ネクリヂン

腎臟病

斯界唯一の權威高貴藥「ネクリヂン」

専門家の間でも腎臟そのものに直接効果を與へる名藥は無いと云はれて居りました。それはネクリヂンの偉大なる効果を知らないものでしょう。

腎臟病は蛋白質が尿に混じて出て行くので神身が漸次衰弱するのであります。

現在腎臟病に用ゆる藥品は大概のものは尿量を増加するので決して蛋白質を止める藥はありませんが、此のネクリヂンは二、三日の服用で蛋白質の出るのを止めるのみならず腎臟そのものに作用して、其働きを良くし、身體中に出來た不用物質及び毒物を速に排泄する作用があります。其他心臓及血管に働いて、硬化、萎縮してゐるのを擴充して血液の流れをよくします。従つて血壓は下る、身體に起つてゐる種々の悪い病狀即ち浮腫、頭痛、身心衰弱、食慾不進、心悸尤進等の外「尿と共に排泄せられなければならぬ身體中の不用物質及毒物の停滞より來る」尿毒症と云ふ腎臟病の時に起る最も危険な症狀を根本的に治療することが出来る貴い藥であります。

價正  
一週間分金七圓也



- ◎ 他藥と服用するも差支なし、全快者より
- ◎ 同病者へ「ネクリヂン」を贈る美しき同情！
- ◎ 各百貨店藥部部及名藥店に有り

大阪市東成區森小路町六四五

發賣元 石 本 藥 園

【文献進呈】

電話 東六四七八番  
振替 大阪四六三五四番



斷然ハイクラス

# スマート酒場

ライオンタイム毎日正午……三時

渡辺橋北話  
電話北五七三七番





【中座の大歌舞伎】

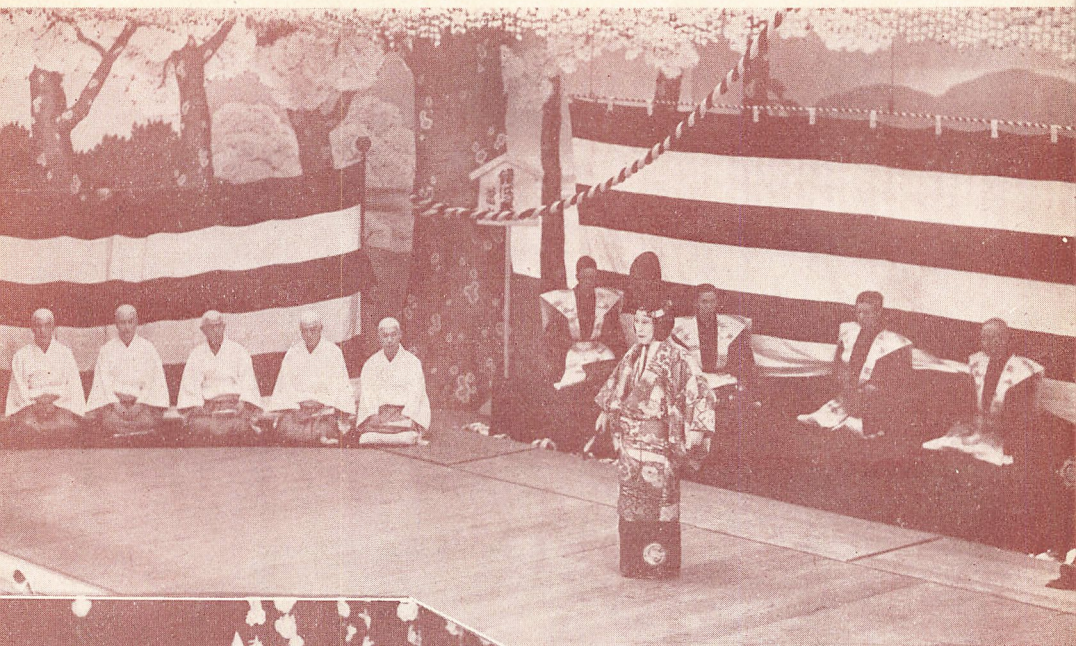
二番目「與話情浮名横櫛」

伊豆屋與三郎  
後=向疵の與三

市村羽左衛門



幸梅上尾 富お姿



面 臺 舞



【中座の大歌舞伎】

大喜利「奴道成寺」

狂言師左近

松本幸四郎



貨百チクコ

うごそもでんはのものの子

うろそもでんはのものの子

橋 薫 心 阪 大

店服呉合十



に粧化淡な楚清

# 粉白水圓御新

色櫻・色肌・白純

錢十五各



園蝶胡東伊 鋪本



# 新聞

# 廣告は電通

支主  
局ナ  
南北益下金吉  
京平上關福  
探天京長京館  
首津城島都館  
巴青華福神札  
里島天岡戸機  
倫濱大鹿岡青  
敦口速平山線  
桑上哈鹿廣仙  
港海賢島島森  
羅藤森六松長  
府東北分山野

本社 東京 日本電報通信社

大阪市北區中之島三丁目  
新刊通信及  
廣告代理業 大阪電報通信社  
電話 五五五  
九九五五  
本局 六一九九  
二一六三  
三〇〇〇  
三〇〇二  
二〇〇五  
〇五五  
〇六〇  
〇〇三



# 御饗料理

築齋

お芝居の

お帰りを

せしおまら

いたして

居ります

道頓堀松竹屋前

電話南

四九四  
八八八  
四五一  
四二〇



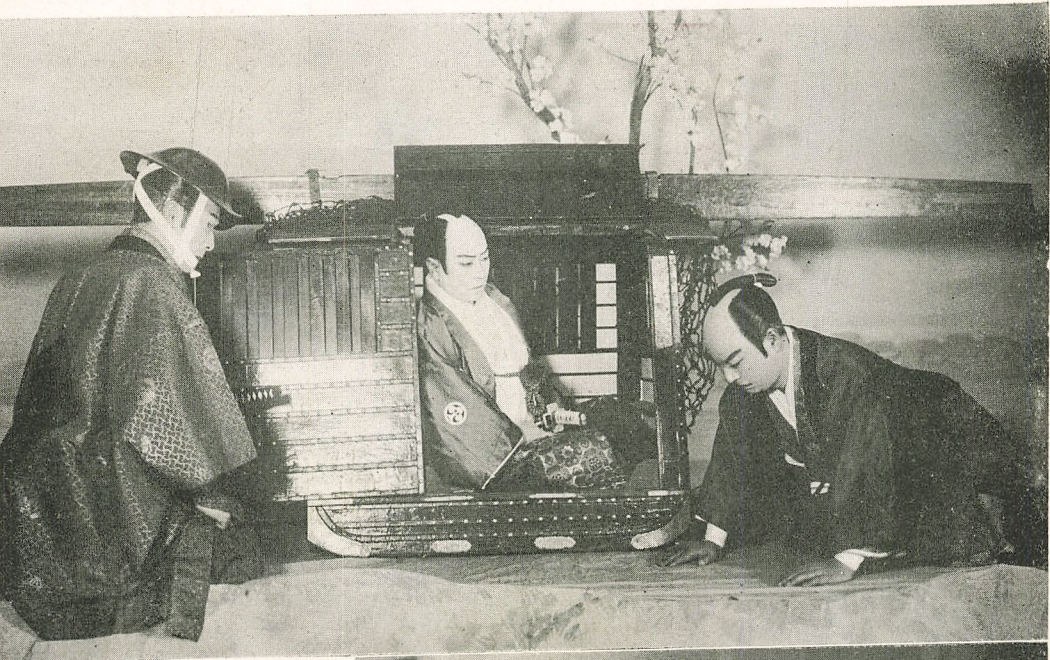


【文樂座六月興行】

上 「義士銘々傳」 赤垣源藏出立の段  
 中右 「御所櫻堀川夜討」 辨慶上使の段  
 中左 「加賀見山舊錦繪」 長局の段  
 下 「紙子仕立両面鑑」 大文字屋の段



大文字屋



(右)  
 本多上野介  
 中田正造  
 駿河大納言忠長  
 波多 穰  
 安藤大 學  
 伊川八 郎  
 (右)  
 大工與四郎  
 辻野 良一  
 陣おまき  
 澤井光代  
 徳左衛門銀和早  
 福岡君子



更生新聲劇 六月の角座

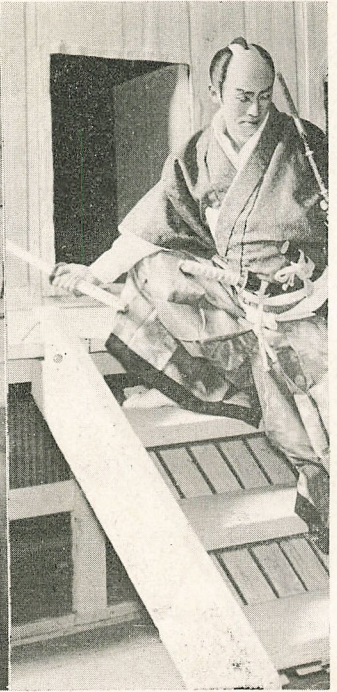
右「巷説釣天井」  
下「女性の叫び」



右 船上員 次郎  
春 子  
左 下 蘭 子  
ジヨツカール

山口俊雄  
小松孝子  
富士野葛枝  
芝田新

召使お賤  
和歌浦 糸子  
庄屋惣左衛門 孝  
原田 孝  
(中下)  
河村 靱良  
藤本 正雄  
松平越中守  
山口俊雄





お祖母さんおぎん  
十 吾  
松井源兵衛  
十次郎



〔 濟 査 檢 〕

子武月如 子由子針お  
樂外 三天 造安父伯  
浦三 生學科法

「新妻盛衰記」

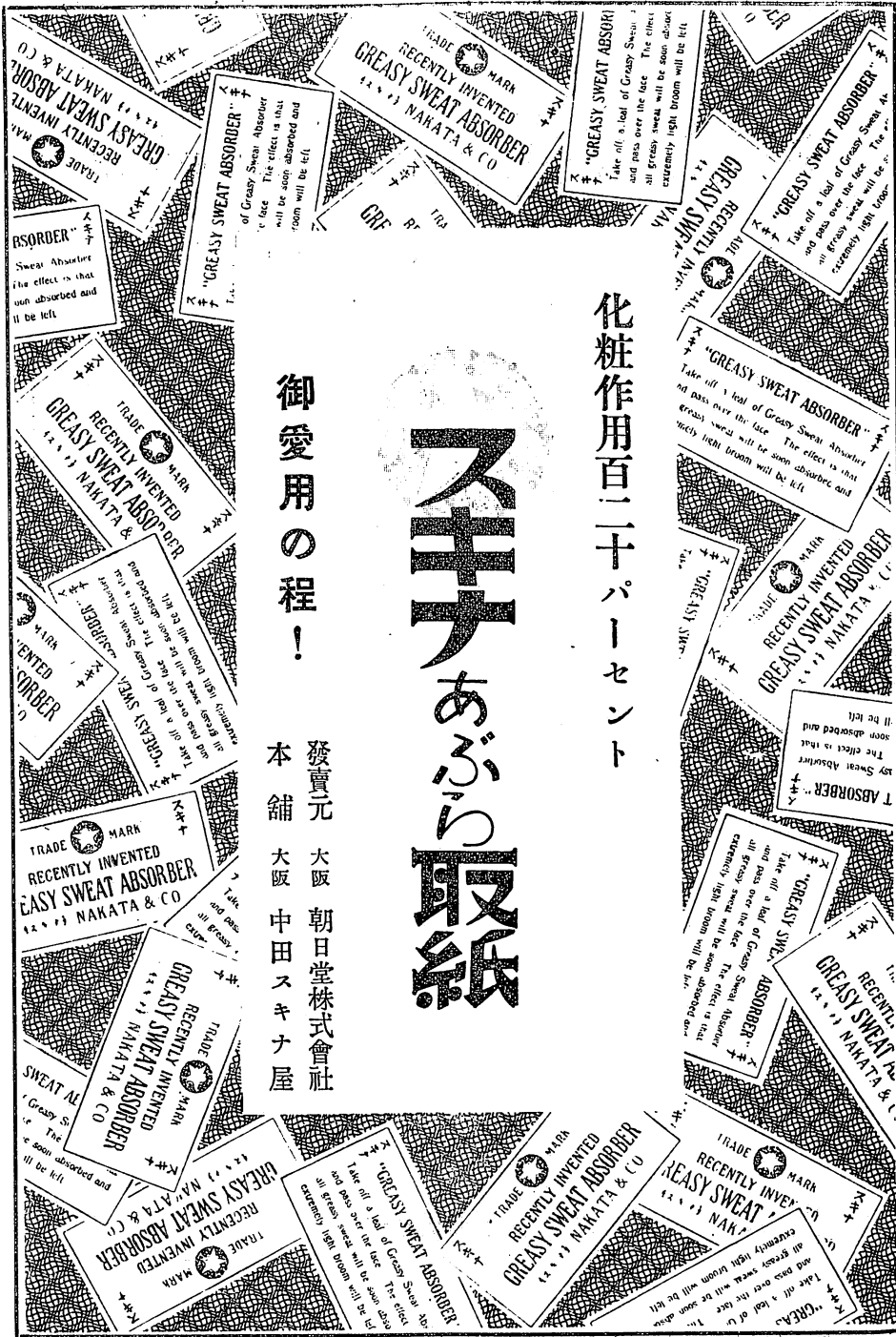
妹娘廣子 春野晋羽  
姉娘初子 守住菊子  
父親彌七 吾

化粧作用百二十パーセント

# スミナあぶら取紙

御愛用の程！

發賣元 大阪 朝日堂株式會社  
 本舖 大阪 中田スキナ屋



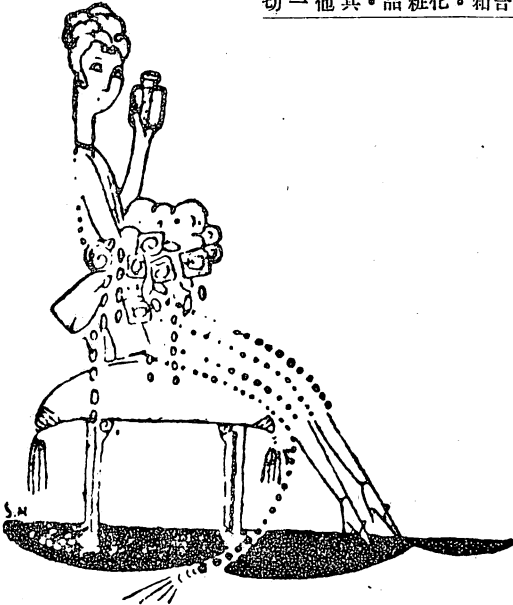
製社會一ミラセ・ーリパ國佛  
品粧化一ピツカ料粧化秀優的界世

料粧化一ピツカ

カツピー香水



ンロコデオ・ンヨシーローヤへ・水香  
(色各)粉白粉・水香トツレイト  
(色各)紅頬・(色各)トクパンコ  
除石粧化・鹼石リそ髭・(色各)紅口  
油香・ーダウパークルタ・洗髮  
ムーリク・油練・ンチンラリア水  
切一他其・品粧化・箱合取用物進



ホカツピー化粧料  
オスランド化粧料  
ヨリスワ化粧料  
大阪 大浦彌商店 輸入元

# 五大作品 .....

映畫なら・大作なら・松竹キネマです。

主婦の友連載  
吉屋信子原作

暴風雨薔薇

八雲恵美子  
山内絹郎  
若水一郎  
結城

婦人俱樂部連載  
菊池寛原作

姉妹

栗島すみ子  
田中絹代  
他オールスターキヤスト

サンデー毎日連載  
長谷川伸原作

馬頭の錢

林長二郎  
柳上榮五郎  
尾上

清水 宏監督  
この母に罪ありや

高田弘子  
川崎弘子  
吉川満子

冬島泰三監督  
決戦河古原城

尾上榮五郎  
他オールスターキヤスト



病

未  
然

特色

- ◇ウチ南京虫等奏効確實なり
- ◇殺菌力強烈にてクレゾール石鹼液の約二倍なり
- ◇防臭力強く撤布後は芳香を放つ
- ◇本劑混入の尿尿は農作物に對し絶對に害なし
- ◎數百倍に稀釋するも効力強烈なれば同種品中最も經濟なり。

衛 研 殺 力 強  
菌 殺 蛆 殺 力 強

ハニール  
のチウセ殺すばこ



日増に暑くなりますと各御家庭ではイヤな蠅が出て來ますが僅か一週間か十日位で幾萬倍にも殖える蠅は相當高價な蠅取劑を使つても死滅さす事は容易ではありません、そこで蠅が未だ飛び立たない時に蠅の幼虫(ウチ)を撲滅すれば勞少くして効果の大なる事は誰しも御考へになる事と存じます然し今日迄確實に(ウチ)を殺す藥劑がなくて困つて居りましたが滿鐵の衛生研究所で製造發賣せる強度の殺菌力ある衛研「ネオベルミン」は効力の甚大なる事は同種製品の追隨を許さず完全に目的を達します。

本劑使用に際し家庭便池中尿尿の多寡によるも普通本原液の「拾五グラム」をビール瓶一杯の水に溶かす(約五十倍)其乳化液を一回に一本乃至二本の使用を適當とす。殺菌力：五十倍溶液：百倍溶液にても一分間以内に死滅す。殺菌力：(大腸菌)其他塵芥箱等には二百倍溶液にて確實に死滅す。

南滿洲鐵道株式會社

製造發賣元 衛生研究所

大阪市東區伏見町三丁目二七

内地一手販賣元

光榮商會  
電話本局三三一五番  
振替大阪三三一七番

有名藥店各デパート

に有り





黒田良田 黒田良田 黒田良田  
 黒田良田 黒田良田 黒田良田  
 黒田良田 黒田良田 黒田良田  
 黒田良田 黒田良田 黒田良田



黒田良田 黒田良田 黒田良田  
 黒田良田 黒田良田 黒田良田  
 黒田良田 黒田良田 黒田良田  
 黒田良田 黒田良田 黒田良田

【浪花座の家庭劇】  
 「お骨の居候」

【京 南座六月興行】

市川左團次一座



上「烏邊山心中」

若松屋お染  
菊池半九郎

市川松菫  
市川左團次



右「大杯觴酒戦強者」  
左「室町御所」

左足輕才助  
實八馬場三郎兵衛  
松永の銀多門

市川左團次  
市川松菫



【京  
都南座六月興行】

市川左團次一座



「室町御所」

右池田丹後將武  
上足利將軍義輝

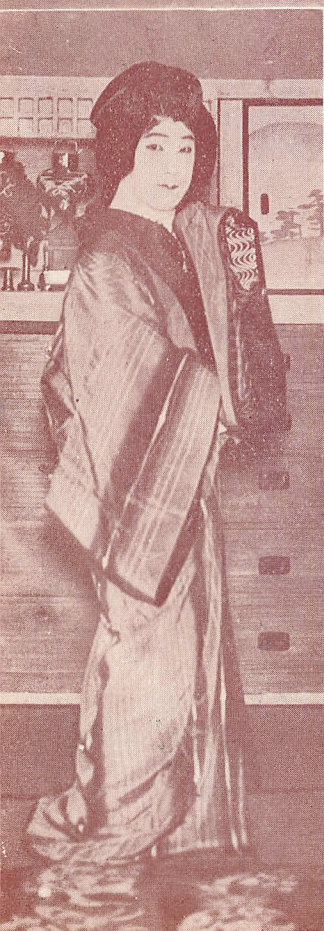
市川左團次  
市川壽美藏



【行興世合顔村多喜・合河場劇竹松】 戸神

〔淵ヶ累景眞〕

子愛東 久お・眞縁村多喜 賀志豊・夫秀村藤 吉新



〔假名屋小梅〕

右 假名屋小梅  
左 津の國屋銀之助  
藝妓蝶次

石都河  
築合  
河 文武  
薰男雄

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

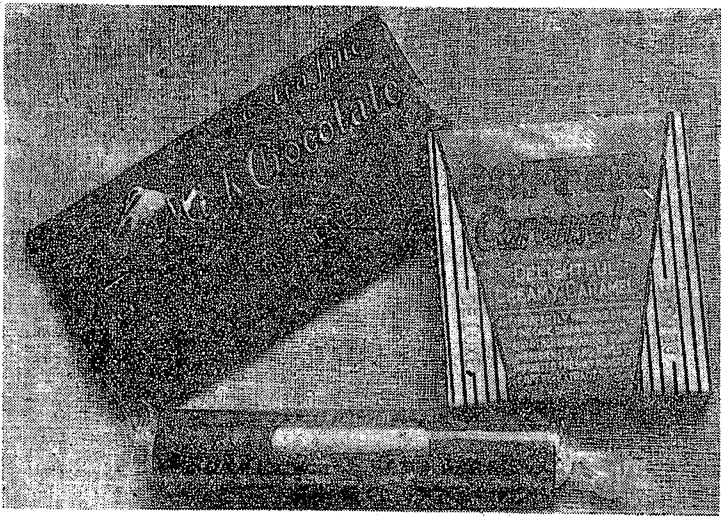
ヨーヒキヤラメル

チヨコレート  
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94) 一六六一番



# ブラク 粉洗いテカ

布袋入六袋一函  
正價 金三十錢



いし美くる明

粉白ブラク

月刊 · 戲劇研究 · 雜誌

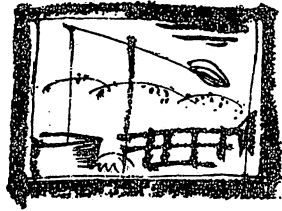
六月號

# 通類編

第六年

第五十七輯





# 東西松竹合併と

## 鴈治郎の東上

日比繁治郎

東西松竹の合併に據る經營の合理化。なんて、演說會の辻  
ビラ見たやうなことを云はなくなつて、俳優の融通交流ぐら  
ひは、既に飛行機でなら二時間半で行ける東京と大阪の間の  
ことだ、お互ひが氣輕くなつて、手提鞆一つで往復するなら、  
それこそ毎日でも異つた芝居は出来る筈だ。といふのは理窟、  
栗おこしや鹽昆布を送るやうには行かぬところに、時勢に對  
する矛盾があるわけで、そこを突き切つて行かうとするところ  
ろに、ソレ、東西松竹の合併に據る經營の合理化。といふ奴  
が必要となつてくる。

そんな理窟は何うでもよい、當節柄觀劇料が安くなつて、  
めづらしい芝居が居ながら見られるといふことになれば、見  
物は獨りでに集まつて來て松竹萬々歳となるに相違なく、最  
早や大分にその曙光も見えて來たといふことだが、その合理  
化のお蔭で、當地では中座の鴈治郎一座に入れ交つて東京歌  
舞伎が大舉六月興行の蓋を開ける。大阪からは既に我童、福  
助の兩君がその尖端を切つて東京軍と盛んに火花を散らして  
會戦してゐるが、六月の歌舞伎座へは、いよく總帥鴈治郎  
君が乗り出して、中車、菊五郎、など、いふ、これまで且て  
一座したことのない顔合はせが行はれるわけである。





鷹治郎君の東京行は既に例年のことで、敢て今年始まつたわけではないが、東京人の鷹治郎を待ち焦がれることは、到底も熾烈な熱意のあるもので、まるで戀人に逢ふが如きものがあるのである。それは何故かといふと、即ち彼の「若さ」に逢ふことによつて、如何に明るい刺激を感じるかである。もうあの年齢だ今年はずこし、皺もあり、足もトボつかうかと案じてゐると、それが何年経つても相變らぬ頑丈さだから、アツと驚くと同時にヤレ／＼と安心して芝居を見てゐる形ちが東京の見物の間に起る瞬間の氣分である。一幕を終ることに、休憩室へ吐き出された見物は一齊に、何は措いても、とりあへず、「相變らず若いね」とか「なんて若いんでせう」なんて真からの感投詞をお互ひに交換する。實際のところ、鷹治郎の藝風には年と共に追々圓熟して枯淡の域に入つてゐるのだが、それを褒める言葉も、「旨いね」とか云ふ言葉も總てはこゝでは「若いね」といふ言葉に引つくるめられてしまふのである。



だから大谷社長が鷹治郎の舞臺姿に注意を拂ふこと一方ならず、まるで娘の子を舞ざらへに出したやうに、神經を眼一

つに集めて、ちつと見すへてゐる。果てが傍らの者を顧みて「君、もつと成駒家に白く塗つて貰つて下さい明日から」かう命令する、使者は直ぐ鷹治郎の樂屋へ伺候して「大谷社長が、モット白く塗つて頂きたいといふ御注文です」と云ふと鏡臺前の鷹治郎君は後ろの使者の方へくると顔をふり向けて、怪訝な顔をして、「大谷さんが、ふう」と驚いたやうに云ふ。だがハイよろしいとも、不可ませんとも何んとも返事はしない、ふん、とだけ云つて置く、だから不承知なのか承知なのか解らないが、使者も心得たもので「どうぞよろしゅう」と捨て臺詞を残して歸つて行く。その翌日になると見物は又さらに一層聲を強めて「鷹治郎は相變らず若いね」と譏嘆する。



だから最貧筋の連中が、七十二歳といふ年齢には全く不似合ひな若さに、「貴方には何か特別の養生法でもあるのですか」とか「九州の若返り法のやうなことを今でも遣つてゐられるんですか」とか聴く人があるが、鷹治郎君には特別の養生法があるわけなし、若返り法なんといふものも遣つたことが無い。それならば相當不攝生で空氣も善くない樂屋生活に五六十年来終始して、何うして彼の如き健康が保てるのだらう、といふ疑問が起るが、其處に偉大なる天分が惠まれて

るわけである。遺傳的に鷹治郎君の體質は頑健である、しかも其遺傳が父系からでなく母系であるところにも其當然さがある。鷹治郎君の父君甞雀は四十一歳で死んだ人だから無論長命ではないがお母さんなり其又お母さんが、いづれも九十歳以上の長命なのだから、不思議は無い筈である。それともう一つは舞臺以外なことに心を勞しないうところに生活の單純さがあつて従つて精神の過勞を來さない。

◆  
そんなわけで古往今來殆んど類例の無い萬年息子の鷹治郎君はおそらく百歳の壽を保つて尙梅忠でも紙治でも遣れるに相違はないが、さうした意味でも、大阪が産んだ偉大なる藝術家として、最早や既に東西の區別を超越して、よろしく日本の鷹治郎であり、否世界の鷹治郎で無ければならないものと思はれる今度の上京では「土屋主税」と「紙治」が演し物になつてゐるが、中座の十間口の舞臺、收容人員千三百人の見物に比して、十五間開口、二千五百人の收容力を持つてゐる歌舞伎座の舞臺での演出に、何十回繰返してゐる狂言ではあるが、甚だ感銘の異なるところがあるのである。見物側の感銘は兎に角として、俳優側にとつても、全然舞臺に起つた場合の呼吸が異つてくると、そこに同じ狂言でも全く未知の世界に入つたやうな新しい感興が湧き揚つてくるの

である。さうした新陳代謝される呼吸の新鮮さに鷹治郎始め全俳優は生きゝとして活躍するわけであるから、大阪の最負筋は安心して鷹治郎上京を構うて遣つて頂いてもよいと思ふ。

◆  
それから鷹治郎君によく東京の話をお聞かうとする人があつる。これは全然駄目だ、鷹治郎君は大阪の土地を知らない如く東京を見たことが無い。これまで何十回上京はしてゐるが、芝居の樂屋と旅館の座敷以外には出たことが無いのだから話題の無いのは當然である。東京へ着く、驛頭の出迎を受けて、直ぐ自動車は細川旅館（築地）へ入る座敷へ坐る。翌日歌舞伎座で稽古、人力車の幌の中から町を覗く位關の山、初日以來打上げまでその通り、一步も外へ出る機会が無い、芝居が終る旅館へ歸る飯を食ふ、寝るのが午前二時頃、朝は正午まで寝る、起きて顔を洗つて、飯を食つて芝居へ行くのが午後二時、だから全く東京は何んなところかさへ知らない、人から聞く話で漸やく、復興後の歌舞伎座の表側を知つたくら

# 色 彩 間 苺 豆

倉 田 啓 明

清元淨瑠璃「色彩間苺豆」は、凄艶の一語に盡きる。本来「法懸松成田利劍」の中に仕組まれたもので、たしか文政六年六月の書卸し、累は三代目菊五郎、絹川與右衛門實は久保田金五郎は七代目團十郎、振附は藤間大助、清元の節附は清元喜兵衛だつたが、この脚本の作者は大南北即ち四世鶴屋南北であることは、疑ひもないことだけれど、淨瑠璃の方は南北の作でなく、松井幸三だといふ説がある。この人はもと増上寺の僧侶で、後狂言作者になりあの有名な清元の「六歌仙」の寫撰や文屋を書いたのだが、祐天上人が累を解脱せしめた頃は、下總の飯沼弘經寺に在住し、後に増上寺へ轉住したのでその増上寺の僧侶だつた松井幸三がこの累の淨瑠璃を作つたといふのも何かの結縁だらうとおもふとちよいと面白いわけである。

然しこの累の淨瑠璃は、初演以來久しく打絶えてゐて、五代目菊五郎も生前、是非上演しようとおもつて、いろ／＼工夫を凝らし、與右衛門には九代目團十郎をと望んでゐたが、終に實現されず、そして梅幸、羽左衛門及び延壽太夫のトリオによつて、はじめて舞台上に掛けられ、素晴らしい好評を得て、今日まで度々上演されるやうになつたのである。この三人の努力によつて創造されたこの舞踊劇は、たしかに日本演劇史の一頁を飾るに足る大いなる功績であると信じてゐる。

一切の寫實を避け、錦繪風に演出して、色氣と嫉妬と凄愴の氣を漲らせながら踊る。單に嫉妬や凄味なら、さ程六ヶ敷はなからうが、その中に色氣を出さねばならぬ累の役はなかく至難で、梅幸の累はこの點さすがに優秀な技を示して、顔も忽ち悪女の相合……になつて、顔の痣の半面に凄味を他の半面に色氣と情味を湛へるさまは敬服せざるを得ない。

初演の際は、着附の御殿模様の振袖の地が空色であつたのを薄紫色に改め、近頃はその紫も濃くしてゐるやうである。與右衛門も最初は黒羽二重、市村の櫛紋の着附だつたのを、後に紫緋に改めてゐるが、やはり黒の方が引き緊つてゐていゝ。それから元來、累の出は本花道、與右衛門の出は假花道であるべきだが、劇場の都合で與右衛門が土手の上から出ることもあるが、これは是非假花道からにしてほしい。



# 聴くかさね観るかさね

高谷伸

歌舞伎劇の興味の中心が、その戯曲内容よ  
り情調方面へ移りつゝ、あることは、否定する  
ことのできない傾向である。

「かさね」の好評も、延壽大夫の清元の音楽  
的な効果と、羽左衛門梅幸の舞臺の繪畫的な  
美感とによるものである。

清元「色彩間 苳豆」は、文政六年六月木  
挽町森田座で書卸された四代目鶴屋南北の  
「法懸松成田利劔」の二番目序幕に用ひられ  
た淨瑠璃で、この場の詞章は松井幸三の作と  
傳へられてゐる。

この狂言は一番目を日蓮記、二番目を祐天  
記とし、宗教狂言を對照させた構想が、南北の  
味増だつたらしいが、日蓮記の蒙古の、い  
す丸も、祐天記の地獄場も、洒落た味よりは

荒唐無稽さが目に立つた。従つて、一番目は初演限り、二番  
目も、嘉永二年の河原崎座の再演と南北復興の機運に乗じた  
大正十四年七月市村座の三回目限りであつた。しかし、木下  
川堤だけは、初演の七代目團十郎の與右衛門、三代目菊五郎  
の累、再演の彦三郎の與右衛門、菊次郎の累以後、暫らく斷  
えてゐたのを、現在の羽左衛門、梅幸で大正九年十二月の歌  
舞伎座で復活し、以來、兩優と延壽大夫との顔が合へば、十  
六夜か三千歳かかさねかといふ程の賣物になつて何回となく  
繰り返され、それ以外でも、勘彌菊五郎、勘彌かく子、壽美  
藏松蔭などでも演ぜられた。

この淨瑠璃の作曲が清元齋兵衛と傳へられてゐるのは書卸  
しの連名を見ると、清元延壽大夫、築壽大夫、富士大夫、佐  
賀大夫、三味線、清元齋兵衛元治延三と、齋兵衛が立三味線  
に居るからであらうが、事實は流祖延壽大夫の妻女お悦の作  
曲だといふことである。お悦は現に權八やおはん、女大夫、

山歸りなどの作曲をしてゐるし、岸澤三藏の隨筆にも「清元流儀も天保の初めまでは婦人の節附なれども工みあり云々」とあり、富本又は常盤津の影響の多い初期の清元には、お悦の手に成つたものが、かなりある。

曲は本調子「思ひをこも心も人に」の道行に始まつて「去年の初秋盃蘭盆」のクドキになり「心で祝ふ菩提心」のあて場がある。「入はくろ」の小唄の味「それその様に他處外に」の後のクドキなども語りどころである。現行行はれてゐる「かさね」は松井幸三の原作の詞句を、大正九年の上演に竹紫金作が整理したもので、字句以外に大差はないが「夜や寒き誠に文は闇の友」の原作を「夜や更けて誠に文は闇の伽」などと改めて、「助が魂魄鑄びつく鎌」より後に挿み、この間に、與右衛門に捕手を絡ませ、かさねの顔の仕替えをつなぐなどが主な相違である。昭和五年の東京劇場の初開場には菊五郎がこの挿手に出たのであつた。「かさね」の面白さは、その作曲にもあるが、それ以上、錦繪の美しさに効果がある。羽左衛門の與右衛門と梅幸の累が兩花道に現れた姿、それだけで歌舞伎の恍惚とした世界へ惹き入れる魅力を持つてゐる。

二人の括えを書くとき、與右衛門は、頭は袋附のむしり、着附は黒羽二重の紋附で裾はから色、襦袢は淺黄縮緬白絹の下附、納戸献上の博多帯、臍色黒柄の一本差白手拭、藍を持つて素足で出る。かさねは、頭は文金椎茸に兩てんなしの花笄

銀の平打、着附は上が空色御殿模様、合が緋羽二重の裏玉の縮緬、下が白羽二重の三つ重、襦袢は白の壁縮緬に、楓の模様で後の血を利かせ帯は白地唐織で扇面に菊の模様、扱帯は淡紅、帶上けと腰巻は緋の紋縮緬、御殿草履を穿き、持物は金銀無地の扇子、紅白縮附きの紙披、絹日傘である。

しかし、勘彌菊五郎で演じた時は、與右衛門は原作にある浴衣の代りに格子の帷子を着、累は、絹の裾模様を用ひた。そして菊五郎の累は、臺袱紗を被つて出て、それを使つて蓮の臺で袈裟に見たり、與右衛門の刀を包んで子をあやす形を見せたり、いろいろ苦心した手をつけ、殊に最初から裾をからけず引いて出たのは古風でもあり自分を知る好い工夫だつたが、原作に據るといふ理由で、與右衛門も累も本花道から出たことは失敗だつた。

「かさね」の一幕は、殆んど錦繪模様の連續と言ふのも過言でない程の美しい舞臺である。その第一面は兩花道の二人である。歌舞伎劇で兩花道がどれだけ役立つてゐるか、野崎の段切、妹背山の川場、その他數へきれない程の例がある。「かさね」の出に兩花道を活かしただけでも羽左衛門梅幸の演出上の成功がある。

梅幸の累の妖艶はいつまでも變らない。羽左衛門の與右衛門の足には浮世繪のエロがある。敢て足のエロは今の女に限らない。そして觸骸のグロ。さらに言へば地獄場のナンセンス。かさねの芝居は、まさに三拍子揃つたものである。



累  
と  
そ  
の  
一  
家

高  
安  
吸  
江

下總は岡田郡羽生村の百姓與右衛門方の屋外に立ち、たゞさへ陽春の暖さに、頭から湯氣をたてんばかりの大汗になつて「阿彌陀も世尊も天眼を以て見天耳を以て聞け」と大音聲に罵る人は、後年三縁山の大僧正となり八十二歳で逝た高僧祐天上人です。當時彼は同國飯沼の弘經寺(千姫の墓がある寺です)に遊學中でしたが、與右衛門の娘十四五歳のお菊が此程から急に狂ひ出し、口から泡を吹いて喉いで居るのを、同侶兩名と共に試みた様々の教化が何ら奏効せなかつたのに業をにやした處で、時は丁度寛文十二年三月十日の事でした。

「恒沙の諸佛、舌相證明すとも誠とするに足らず。若我が云ふ事誤りてあらば、金剛神をして、我首を打碎かしめよ。若それ稱名終に功德なからんには我今より戒を破り俗に還り外道を學びて佛法を滅ぼさん。」稚い頃既に彼の師を驚かした非凡の容貌、殊にその爛々とした眼光が、勇氣勃々たるこの大獅子吼と共に、三十六歳の上人に一層の偉力を與へ、さしにも頑強だつたデモニズムの發作も漸く鎮靜することが出来ました。記録には廿六歳とありますが、寛永十四年四月八日の誕生ですから卅六に當ります。發作は同年正月四日に初まり三月振に治まつてから更に一ヶ月後の四月十九日に再發して胸痛苦悶を起した處、今回は上人から十念を授けられて直に治りました。此初めの時のが累で後の助の怨靈だと云ふのです。

助と云ふのは、上記與右衛門の先代が同郡曾根村から娶つた寡婦の連子で、跛で砂の酷さに繼父から惡まれ、六歳の時絹川邊の横堀で實母のために殺されたのが慶長十七年四月十九日、即六十一一年目の同月同日に發作したわけです。累は助

の異父妹で、兄の殺された翌年(一六一三)に生れましたが、助同様の不具者で、重い痘瘡のため顔は乾いた柚の皮に似、色は漆塗のやうに黒い。其上根性が悪くあくまで倭けた氣質故、助の再來との意で人がかさねと字をつけたと云び、又或書には性淫亂で邪見のため、度々嫁しても離別せられる事九度、それで里人があだ名して累と呼んだなどとも出て居ます。是或は附會の説かも知れませんが、彼等の菩提所法藏寺の過去帳には俗名ると記されて居るのを、何故、かさねと呼ばれるのか明でありません。

初累は兩親死後、廻國の六十六部の此村へ移住して居たと結婚しましたが、もとく七石許の田畠に眼がくれて此醜婦を娶つた奥右衛門がどうして長く辛抱して居ませうか。承慶二年八月十一日、累が四十一歳の時、絹川向の豆田へ行ての歸途、刈豆の重荷を背負せた儘その横濠、丁度助が殺されたと同場所へ突き落した上、救ふ様に見せかけて自分も飛び込み、目や口の中へ砂を押し込んで殺してしまひました。後に此處を累が淵と呼び、今日でも一尺程の流て土橋の跡が残つてあるそうです。清元の名題刈豆は無論此から出たのです。奥右衛門は其後幾度妻を迎へても皆若死で、ようく六人の妻に女子出生。それが前に云つたお菊で、此大病の前年十三歳の時に母親は死にました。然し祐天上人の法力と奥右衛門悔悟の剃髮との功德で此後何の障礙もなく、お菊は享保

十五年まで七十二の長壽を保つことが出来ました。

累の解脱を仕組んだ狂言は享保末から大分出來ましたが、始は傳説其まゝ、醜女として取扱はれ、現今の様に美女からの變相は初代櫻田治助の伊達義阿國戯場(安永七)が最初で、先代萩に取入れられた身賣の件がそれです。併し此累を尤も多く使つたのは南北で、彼のかいた五ツ程ある累の中で尤も行はれたのが法懸松成田利劍(文政六)、殊にその二番目の序清元の色彩聞、お菊は近年梅羽の復活によつて一層著名になりました。お菊の作歌はもと増上寺の坊さんで外に喜撰、文屋、三保の浦や雲助なども作つた松井幸三ですが、キリシタンの様なディオウス丸、それは蒙古遺族の武術使で、日蓮上人に本性を見現はされるなどと南北式犬ヨタの法懸松一番目中の石和川に其發端が織込まれてあります。

累の爲には實の親菊の夫の助を殺すは此場で、久保田金五郎後の奥右衛門は菊と密通したのを知られて助を殺しましたその鎌と觸體が木下川の流に漂ふことになるのです。傳説の異父兄の助がこゝでは父となり、繼子のお菊が母になつて居ます。そしてお菊の從兄であはさうとした金五郎の名が奥右衛門の舊名に使はれました。元來此二番目は四谷怪談の先驅をなしたもので、奥右衛門は明かに伊右衛門のタイプをそなへて居ることは、先年市村座で菊、勲等が演つたのを御覽になつた方は御承知の事と存ますから詳しくは申しません。



かさねの  
實説

三木八十八

常總鐵道沿線の中妻驛を俗にかさね驛といふさうですが、それはこの驛に近く、鬼怒川の川向ひに法藏寺といふ破れ寺があつて其處に累や與右衛門一家の墓などがあるからのこととあります。それで、累の因果物語も全然拵り話でもないでせうが、所謂實説なるものも、何處まで信じていいか分らない程、かなり潤色されてゐるやうに思ひます。が、兎も角もその實説として傳へられてゐるものを述べることにしませう。そして脚色された芝居の方と對照してみませう。

今から三百年の昔、下總岡田郡、羽生村の名主に堀越與右衛門と云ふのがありましたが、どうも女房縁の薄い男で、幾つとなく出たり這入たりしたのですが、いつも永續きしませんでした。處が、隣村の横曾根に一人の男の兒を持つて寡婦暮しをする女があつたので、これを他人の世話で貰つて女房にしました。

連れ子といふものは、たゞさへ邪魔にされるものですが、この助といふ男の兒が顔は不細工、その上に跛だつたので、與右衛門の氣に入らず、従つて女房との間に氣まづい事も出來るといふ譯です。女房はそれが苦で、つひ子供さへ無かつたならといふ氣が起つて、とうとう鬼怒川べりの七塚堀へ投げ入れて殺してしまひました。(或は鎌で咽喉を抉つて土橋の下流に投げたとも謂ふ)これが助の六ツ(或は三ツの歳)慶長十七年四月十九日のことでした。與右衛門は、實の子を殺してまで暖い家庭をつくらうとした女房の心づかひを大變嬉しく思つて愛しました。そのいとしい女房に翌年女の兒が生まれました處が、その兒も顔が醜く、思ひなしか死んだ助に似てゐました。そしてやはり跛だつたのです。(或は色の黒い上にあばたがあり、片眼で、頬には痣があつたともい



ふ)名は累と付けたのですが、世間では助が重ねて産れ出たのであらうと、かさねと呼んだと云ひますが、これは後の人の拵へ事のやうに思ひます。恐らく最初の作者がわざと累の字を訓に讀み變へたものでありませう。

累のかさねは、かやうに醜かつたが、流石に自分の子でありますから、與右衛門も助のやうに無難作に殺すこともなく無事に育つて行きました。併し、與右衛門夫婦は、自分の犯した罪に責められてか、相ついで歿し、残されたかさね獨り寂しい日を送つてゐました。

その頃、中國邊のもので谷五郎といふ六部が病に罹つて村の阿彌陀堂に起臥してゐましたが、かさねはそれを隣れと思つて何かと世話をしてやりました。つまりそれが袖すり合ふも縁の端じ、二人は改めて夫婦となり、谷五郎は與右衛門の名を襲つぐことになりました。(これがかさね三十三の時といふ。)

かやうに二人は一緒になつたものの、譬にいふ悪女の深情で、些細の事にもひがみ心から嫉妬を起す場合が尠くなかつたのでせう。又、谷五郎とても女よりは家の財産の方が目當であつたのでせうから、二人の間はだんく睦じさを缺いて行きました。

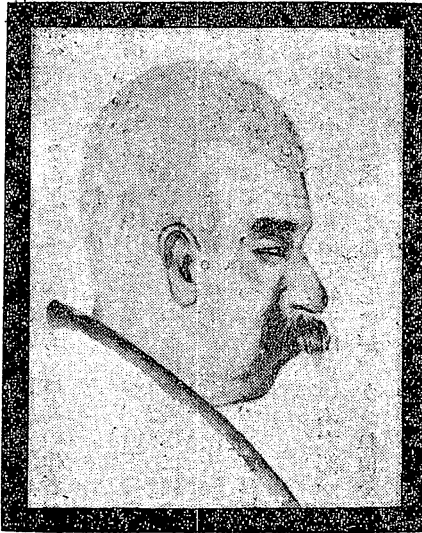
正應二年八月十一日の夕暮、畑仕事を終へて戻る鬼怒川堤與右衛門は腹が痛むからと、自分が負つてゐた苳豆の籠を足

許のおほつかない女房の背に負はせました。それも男が女に對する憎しみの現はれであつたのでせう。川べりを跛ひきき行く女の後姿を見ると、與右衛門にふと殺意が起りました。突然彼は後からかさねを川へ突落しました。そして自分も續いて飛込むと、救ふと見せ掛けて壓殺してしまひました。無論、誤つて溺死した事にして法藏寺へ葬つたのですが、この犯行を靈仙寺の下男が柳の木影から見えてゐました。(或は草刈鎌で斬殺し、川へ投じたとも云ふ。)

さて其後、與右衛門は後妻を迎へましたが、誰も彼も縁が無く、四五人目の嫁、貝塚村のおきよといふのが納まつて、始めて子が産れました。やはり女の兒が、これは顔も姿も美しく、無事に生ひ育つて行きました。

菊が十三の歳、母親が死んだので、その甥の金五郎といふのを養子に迎へることになりましたが、その翌年、寛文十二年の正月始から菊は奇病に犯されて、頻に父や、先代の舊悪を口ばしするので、これは正しく、かさね、助の怨靈の爲す業であらうといふので、丁度その頃、飯沼の弘經寺に修行してゐられた祐天上人に縋つて、怨靈の退散を祈ることにしました。

年は未だ若いが高徳の上人、村人達に珠數を與へて百萬遍の念佛を唱へさせ、菊には因果の理を説いて、教化を施されました。そこでかさねの怨靈、つゞいて助の怨靈は成佛得脱



故岡田伊三次郎氏

し、菊女の病も癒えました。それが四月十五日で、この年月が法藏寺の助の墓に刻まれてあります。之を佛果の繹として與右衛門は剃髪し、西入と名を改め、かさねの菩提を申うた……と傳へられてをります。

今度の芝居の木下川の場は、前に述べた鬼怒川を似寄つた音で暗示したもの、淨瑠璃の名題「色彩間 荳」の意味もお分りになりましたでせう。尙、與右衛門の本名を金五郎、

累の母親を菊、その夫を助、十念を授けた僧を願念と作者が名付けてゐるのも、それ／＼實話から拾つて來てゐるのは申すまでもありません。與右衛門が金五郎時代に累の親を殺害しそれを識らずに私通した娘累に因果が廻つて、心中しやうとまでした相懸の男の手に返り討になるといふのが、此一場の筋で、陰鬱な舞臺を音楽化し、舞踊化した所に、面白さがあります。

五月廿五日午前七時五十分天王寺石ヶ辻の自宅で膽石症に胃潰瘍を併發して死去した岡田伊三次郎氏は二三年來本誌の表紙繪を提供して載ていた方です。享年五十三歳——素晴しく趣味の廣い人で、殊に繪には親しみを持ち常に畫家の隠れたるパトロンとして有爲の人材を畫壇に送るために勤められた人です。

それに大の劇通家で古版畫の蒐集家として識者間に定評があり、江戸繪、上方繪（主に伊儀の似顔繪）は量質共に日本屈指の蒐集家です。既

に故人の藏庫の發表としては昭和四年版で黒田源次博士の「上方繪一覽」が世間に出、更に本年秋は獨逸に於ける世界古版畫展に支那の古版畫を出品する様な話もありましたが、それを前に逝かれたるは残念でした。

故人所有の支那版畫については藤懸静也氏が國華誌上に紹介されて居ますが世界有数の聚集家です。

實に昭和の兼腹堂とも云ふべき人で氏の逝去は關西畫壇のために惜しむべき事でありませう。



# 『かさね』と『奴道成寺』との關係

西尾 福三 郎

清元のかさねで通る色彩間、莉豆の書卸しは、文政六年六月の森田座で、本名題は法懸松成田利劔と云ふ。作者は例の大南北、狂言の内容は日蓮記と祐天記の混交したもので、この通し狂言の二番目の序が木下川堤清元の出語りになつてゐる。全體の筋は、南北好みでする分入組んでゐて煩はしいからこゝに掲げる事を遠慮しておくが、二番目物の序と云へば一日中の通し狂言の眞ん中頃に當る譯だ。昔の作者は、序破急の三段の中へ適當な息拔きの一場を點綴する事を忘れなかつた。息拔きと云へば少々誤弊があるが、ともかく發端から漸層的に葛藤を重ねて來た叙事劇の中へ、突如として一篇の叙景詩劇を添彩する事で一種の氣分轉換を企圖しやうとした。竹本劇に於ける道行の場がそれである。

道行には詩のやうな叙景の文句とそれに恰はしい優美な振事とが附き物でなければならぬ。所でこの色彩間、刈豆も法懸松成田利劔と云ふ通し狂言の中の道行き場として清元の出語りで上演されたものである。上方の竹本劇に源を發した道行きの場面が、この時代の江戸の狂言になると、こんなに迄著しく變化してきたと云ふ事を考へ合せると仲々興味が深くなつてくる。美しい若衆と御殿女中、これが百姓與右衛門夫婦であつたり、奇怪な靨黠の出現を機として凄愴な殺し場があり、美女が忽ち二目と見られぬ醜女に變化し、今迄情緒の濃やかな場面が一轉して血腥い殺し場から、更に再轉して怖ろしい化物場に變化する。江戸文化の爛熟期たる元祿前後を境として、化政の頃ともなれば、もう一般の氣風は靡爛を通り越して頹廢に近かつたであらう。さうした時代の耽溺的な民衆の心に強くアツビールするには、この程度に目眩しい變化と極度な突つ込み方をしなければ答へなかつたものと思

はれる。

扱て文政六年から二十六年を過た嘉永二年六月に、河原崎座で天竺徳兵衛の二番目物に喰付けて再びこの狂言が演じら

すると、累の亡靈は道哲の首を引き抜いて退散する。次の場でおろくが小袖を川で洗はうとすると、累の幽霊が田舎娘の姿で又ぞろ化けて出る。この幽霊の半面が道哲であつて、つ

れ、以來七十何年振りかで大正十年十二月に歌舞伎座で梅幸羽左延壽によつて復活される事になつた。それ以來この名トリオは幾回となく繰り返して演じられて

〽思ひをも心も人に染ばこそ戀と云ふかほ夏草の消ゆる  
間近き末の露元の雫や世の中の遅れ先立つ二道ぞ。  
東の歩みより與右衛門黒羽二重の着付狹み帯大小  
尻端折り麻ごもをかむりばた〜にて出る。  
本花道よりかさね高島田御殿模様の振袖着付織物の  
帯を矢の字に結びしごきを締めもみ結のそぶり  
絹眼の日傘をさしかけてはた〜にて同時に出る  
〽同じ思ひに跡先の別ちしどけも夏紅葉梢の雨やさめやらぬ。

まり双面になつてゐるのである。この場が道成寺になり、鐘入りがあつて後引き上げると以前の亡靈が鬼女になつてて捕手と立廻つてゐる所へ男の助が押し戻しになつて出ると云ふ順序、この切の所をかさね道成寺と云つてゐるかさねと道成寺

### (一) 豆 莉 間 彩 色

石 む ほ お

與右衛門

やつたぞ。

〽夢の浮世と行きなやむ男に丁度青日傘骨になる共阿の  
そのあとを逢ふ瀬の女氣に怖い道さへ漸々互に忍ぶ  
戀の草葉の露の螢火ももう追手かと身繕ひ心關屋も跡  
になく木下川堤につきにけり。  
兩人花道にてよろしくふりあつて舞臺へ来て  
コレかさね思ひがけない此處へそなたはどうしてき

るが、このかさね道成は殆んど女物許りである。この年迄の道成寺

しかし、清元の色彩間、菴豆としてではなく、單なるかさね與右衛門の芝居としてなら度々上演されてゐる。その中の一つには慙紅葉汗顔兒勢と題する伊達騷動の狂言がある。文化十二年河原崎座で七代目團十郎十役早變り、頼兼高尾男の助仁木外記勝元道哲滿祐與右衛門累と云ふ目眩しい早業だ。この芝居の終りに累の幽霊が與右衛門の妹おろくを苦しめた

り道哲が強請に來たりする所がある。其處で祐念上人が回向

寺に到つて始めて男物の萌芽が見られる。(尤も寶曆四年に江戸鹿子男道成寺があるがこれは瞭然した事が分らない)それから十四年後の文政十二年に忠文道成寺が中村座で演じら



れてゐる。これは白拍子花子で出てきて鐘入りの後の出には藤原忠文の亡霊になつてゐる。本名題は道成寺思戀曲者と云ふ。これが先づ

曲の道成寺を出典にしてゐる。が謡曲のそれは元亨釋書今昔物語靈異記華嚴縁起等に遡つて考へられる。歸する所は印度の佛典説話から出て支那に傳はり、それから日本化されたものと思はれる。

今日の奴道成寺の確實な母胎であらう。次いで天保十四年十一月河原崎座で演じた江戸紫男道成寺、お好みによ

かさね どうしてとは惘然な一處に死なふと約束してお前一人覺悟の書置、こゝまでしたふてきたからは共に殺して下さ

私に先年道成寺へ行つたのは春の夕暮ならぬ書下りだつた。入相櫻は既に散つてゐた。〆月落ち烏啼いて満沙程なく日高の寺の江村の漁火……と云つたやうな趣は感じられなかつたが、入潮の、煙充ちくる小松原は目の當り、今は煙霞の濱と云ふ氣取つた名で左手の日高川の裾と御坊灣の入江と相接する邊にはのゝと見渡された。

## (二) 豆 苺 間 色 彩

石 む ほ お

與右衛門 切なる心は尤もなれど其方の養父が預かりし撫子の茶入れ紛失ゆへ殿さまのお咎め受けそれさへあるにそなたと死んでは親への不孝思ひあきらめこゝから早う歸つても。

〆云ふ顔つくく、打ち守りひよんな縁で此のやうに遂かうなつた仲ちや故勿體ない事ながら去年の初秋孟蘭盆に祐念様の御十念その時ふつと見染たがほんに結ぶの神ならで佛の庭の新枕、初手から蓮の臺だとして祝ふ苦惡心後生大事の殿御ちやと奥の勤めの長局役者びいきの噂にもどこやら風が成田屋をお前によそへと樂しむ心お年忘れに奥御殿、うちまじりたる騒ぎ唄。

〆入れほくらく起請誓紙は反古にもなるが五月六月はまんざら反古にもなりやせまい。

〆唄ふ辻占今の身にあたりて私が恥かしと跡ひひさして口ごもる。

これが今日演ぜられる奴道成寺に一番近い。所謂道成寺物は今日名前だけ残つてゐる物等勘定すると三十種に近く、之等は何れも謠

十七段ならぬ五十段の高い石段の峻く苦かつたのを思出す。道成寺は芝居名所として名高いが、それと共に古美術を語る者にも見逃してはなるない寶庫である。



# 淺草を語る

寺井龍男

めつきり、淺草の出入が少くなつたと、淺草に住む誰れもが云ふ。では、何故淺草に人が集らないのだらうか——と反問すると、やれ野球があるからだとか、相撲があるからだとか、新宿の方へとられるのだとか、まぢまぢの議論で、ちつとも、それに眞實性がない。ちつとも、その根本原因が、はつきり判れば今更らしく、出入がないと騒がなくても、それに對照するだけの處置をほどこすのだらうが町會で、大淺草繁榮會を組織するやら、興街組合で、淺草の宣傳を初めるやら、新聞雜誌を發行しても、淺草そのものが、現在、我等、その日の糧を得てゐる人間にすら、興味がなくつてゐるのだから、金が少くなりつゝあるのも、苗已むを得ないことである。

由來、淺草は、所謂不夜城であり、歡樂境であり、公園であり、觀音様であつたものが現在の淺草はどうだらうか。不夜城といふ言

葉は意義通り、夜があつてないところでないればならぬ。それに今の淺草は、興行物がはてること、ぱつたり暗くなり、ルンペンの群があらちの飲食店の厚箱をあせり歩き、十時半から十一時にかけて、先づ商店が燈を消し初め十二時には、飲食店カフェーが全部店閉ひをするので、まるで、暗となつて仕舞ふ、鐵骨コンクリートの本建築の常設館が、まるで廢物の様に、六區にそびえてゐる、通つてゐるのは、殆んど、ルンペンばかり、これどうして不夜城であり、歡樂境であり得やう。

淺草へ行つて活動を見やうと思つても、近頃の様に取締りが厳しくて、回轉數の制限、入場人員の制限で、もの日はたいてい何處の小屋だつて満員客止め、營業者側が泣くのはもつともであり、淺草へ遊びに来る連中だつて、折角、一日の休みを活動を見やうと思つても、何處へも這入ることが出来ない様ぢや

あ、だんだん淺草へ来る人が少くなるのは無理がない。あふれるだけあふつて、詰るだけ詰つて、汗だくで見えてゐて、其處で、初めて淺草の活動を見た感じがしたものだが一と或る古いファンが云ふのも、あながち眞理でないと言つて云へやう。

電氣飾裝をするには本廳の許可が入り、看板を上げることが出来ない——それからそれへと、なかなか嚴重な、興行物取締規則にどうして、淺草の興行物が榮えやうぞ。

そして、淺草公園といふのは、まるで、ルンペンの巢であり、晝は晝で、あらゆるベンチは、彼によつて占領され、夜は、彼等のねぐらとなり、木立ち繁る間から、のそり、大男が出現すれば、誰れだつてどぎも援かれて、こんな公園へ二度と足を入れないであらう。何故、公園に光をつけないか、暗は、彼等の犯罪を益々ばつこさせるばかりであるのに。

觀音様はどうだらう、善男善女に信仰的となつてゐる淺草觀音様が、いまだ、改築工事中であり、コモをかむつた本堂に、何のありがたさも感ぜられないのはもつとものであるまいか。金色さんせんと、かやいて

# 「キブス固煉齒磨」



本品を使用すれば幼時より老年に至る迄歯牙を完全に保つ事が出来  
 何故なれば、キブス煉齒磨は刷子がとゞかぬ微細な間隙へ侵入して常  
 に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであ  
 りますから毎日二回必ずキブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は  
 爽快になられます。

本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります有名な  
 百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形 壹個 金七拾錢 大形中味 壹個 金六拾錢 小形壹個 金四拾五錢

ロンドン パリス  
 デイ・エンド・ダブリネー  
 日本代理店 株式  
 會社 横山商店  
 キブス株式會社

東區豊後町三番地

法燈のゆらめきも靜かに、いつも鐘の音がし  
 てゐて、はじめて、そこに、ある有難さを感  
 じるのだ。

飲食店はどうだらう、やたらに安いばかり  
 を能書してゐる店と、やたらにでかい屋體を  
 はつてゐる店とで、一寸御飯を食ふといふ店  
 がないために、淺草へ飯を食ひに行かうと云  
 ふ人がない。

淺草は、興行物で、淺草を代表してゐるも  
 のであるのに、その興行ものが、矢張り、昔  
 のまゝの興行ものでしがないために、日々、

衰退して行くばかりだ、江川の玉乗りのおも  
 かげを何處に忍び、木馬館のジントの寂しき  
 を誰れがなげかうカジノも終り、萬歳、浪花  
 節又然り、芝居はもろ倒れてひとり、活動の  
 みが、漸く、命脈を保つてゐるとは云ふもの  
 なく、その活動が、今日、いづこも客が這入ら  
 なくて弱つてゐる上に、今度の警視廳の取締  
 りで、にづちもさつちもつかなくなつてしま  
 つた。

より華やかに、より明るく、よりにぎやか  
 に、淺草がなつたとて、矢張り淺草、これら

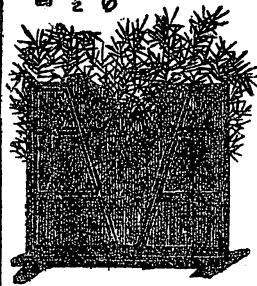
興行ものが、さかんにならないと、今の苦境  
 から抜け出すことは出来ないだらう。誰れか  
 偉大なる興行師出て、およそ、淺草をせつ  
 けんせずんばあゝ、いまより、どうすること  
 も出来ないだらう。

淺草には淺草のよきもあり、捨てられぬ魅  
 力がある。淺草を愛し、淺草を讃える人々も  
 毎夜の様に六區を歩く、しかし、それらの人  
 々が、ほんの一部の人々でしかないことは、  
 餘りにわびしいことではないか。

五、二五

芝居みたま

おどろきの  
義経の  
氣の圖



義経千本櫻

渡海屋より  
大物浦まで

— 中座上演 —

渡海屋内の場

辨慶が退風まぎれに西町へ買物に行く  
出て行つた後へ、義経詮議に踏込んだ相模  
五郎、入江丹藏の二人。その聲を聞いて銀  
平の女房（實は典侍の局）が出て、押し止  
める。二人はそれをつつて無二無三に奥  
へ這入らうとした折柄です。蹄つて来た此  
家のあるじ——實は新中納言平知盛。  
「……あなた方が御無理と存じます、一夜  
でも宿をいたしますれば商ひの旦那、其座  
敷へ踏み込ましてはお客様へ私が立ちま  
せぬ……了簡なされてお歸りなされませ」  
意氣込む彼等をやがて銀平は苦もなく追  
ひ返し、義経主従の出船の用意をすべく奥  
へ入る。この様子を知つた義経は四天王を

随へて出て、  
「今の難儀を救ひしは町人に似合ぬ動き武  
士に引上げ召使はさんに、かく漂泊の身と  
なつては……」と、落ちてゆく、現在の自  
分を悔やむ言葉。やがて船頭が出船を知ら  
せて来るので主従は去つてゆく、  
程なく奥から再び現れた銀平  
「渡海屋銀平とは假の名、新中納言知盛、  
實名あらはす上からは……」  
と、娘お安（實は若君）を正座に直し、  
「此年月御乳の人を女房と云ひ、勿體なく  
も若君を我が子と呼び奉り、時節を待ち  
し甲斐あつて、九郎判官義経を今宵の内に  
討取つて年來の本望を達せん事、アラ嬉し  
や、喜ばしや」

と、時世ならば淺ましくも御尊體は知盛  
と共に海に沈むと世を欺き忍んで来たが、  
いよ／＼今日こそ一門の恨みを晴らす時が  
来たとばかり勇躍。知盛は今宵の難風を利  
用して船中に討取る計略だ。  
「勝負の場所は大物の沖、提灯松明一度に  
消えれば、我は討死、君にもお覺悟させ申  
せ」と、跡くれ／＼に頼む、典侍の局は  
「目出度う祝して出陣あれ」  
と、義経討手に赴く知盛を勇氣づける  
遠くは浪の音……  
大物浦の場  
大物浦では若君始め典侍の局は知盛討手  
の吉左右を待つ所へ、相模五郎、入江丹藏  
交々に味方の苦戦を傳へる。



芝居 みたま

沖の提灯松明も次第に消え、はては知盛討死が傳へられる。最早味方の運もつきたと知つた典侍の肩若君に涙ながら、「お覺悟遊ばしませ」

「コレ、乳母、覺悟くと云ふて何國へ連れて行くのぢや」無心の若君をしつかと抱きあげ、八代龍王に、若君の守護を念じ、あはや渦巻く波に入らんとする刹那、早くも義經主従君を小脇にかみ取る處へ、手負ひになつた知盛よるび来る。

「若君何れにましますぞ、お乳の人、典侍の肩」と叫ぶ、聲に應じて、姿を見せた義經が詰める。

「其方西海に入水と偽り此處に忍んで一門の仇を報ひんとは、天晴な所業——若君は必ずつゝがなきやうお計らひ申す」と誓ふ。「我斯く深手を負ふたれば、ながらへ果てぬこの知盛、いかに義經、大物の浦にて判官に仇なせしは知盛が悪靈と傳へるや、サ息ある内若君の御供……」

「若君の御身は何國までも供奉なさん、心残さず成佛あれ」目に涙した知盛は、若君の御顔をしば打仰いで、巖によじのぼり、碇綱を身にまきつけ、碇を高く差上げ渦巻く波の中に洗んでゆく……。

全國著名遊覽地御案内

御料理旅館

むぎしや

奈良三笠山麓  
電話 七三〇〇番

大垣公園城畔高台  
本店 吉岡樓  
電話 〇八・七九番

支店 千歳樓  
電話 八二〇番

別館 流芳閣  
全 威呼亭  
電話 〇八・七九番

關西線笠置驛ヨリ三丁

笠置館

御料理館 笠置温泉

京都府笠置(木津川畔)  
電話 〇五番

理想ノ避寒好適地

相州湯河原温泉

伊豆屋旅館  
電話湯河原園二三番

全別館  
電話 一二三番

地震には絶対安全

東海道に尤も近き山の温泉  
別天地  
伊豆新古今奈温泉

見晴山の太陽

松仙閣白石館  
電話伊豆長岡二九番

三島驛、沼津驛より自動車、電車にても廿分地震の絶対安全地帯

本欄ノ廣告ハ左記  
へ御申込下サイ

『道頓堀』廣告取扱所

三省舎 中江三省  
大阪市住吉區阪南町東三  
東京市赤坂區築南坂町八



# 立治店漫談

瀬川春郎

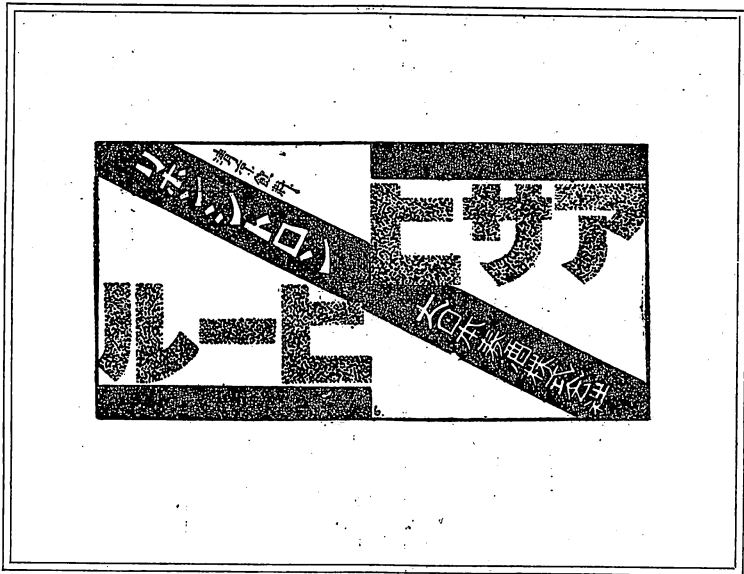
世話情存名横櫛と云へば、お富與三郎の立治店と、左程芝居に親みを持たない素人でも直ぐ頷く程有名であつて、其れで居て立人も全部を知らないのが此の芝居でせう、伊豆屋の養子與三郎が義弟與五郎に義理を立て吉原で放蕩して居る序幕から大詰迄酷銘に演ると九幕二十一だかの随分複雑した長々しい芝居だが勿論私は見た事が無い、通し狂言として上演されたのは何でも四五十年も前の事で大概は木更津の見染めから、それ近頃では省略して立治店文を上演する事が多い。

今度は珍らしく木更津から立治店迄二幕四場を見せて呉れるが、肝心な箇所は悉皆其筋から制限されて仕舞たので只経緯を見せるに止まり随分呆氣ないものに成て居る、子供心におほえて居るが淺草の官戸座で随か今の橋やが花橋時代であつたと思ふ、岩井松之助のお富、鬼丸（先代）の蝙蝠安、

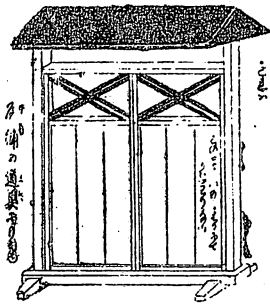
中村芝鶴（故傳九郎）の多左衛門、菊四郎（先代）の源左衛門で、木更津から立治店迄原本通り演出されたのを見た事があつた、それで行くと海岸の見染めは三ばい返して大體に現在と同じだが、源左右衛門の内如きは現今のとは甚しい相違のある事を思ひ出す、此頃は省略して居るが此場で海杭の松と藤八が兄弟の事や、眞鶴の香爐が紛失して居る一條が源左衛門の出發前にある、源左衛門が平馬と共に鎌倉へ上ると出て行つたあと、松の口説は簡單と丁寧との相違丈だが、二度目の返して與三郎の忍び込み、お富との色模様は獨吟を充分使つてコツテリと演り、愈源左衛門が踏込んでお富は松五郎に追ひ廻され逃げ込んだ後の與三郎の棚殺しは實に凄慘を極めたものだ、源左衛門と子分とで三十四太刀斬て最期に手買の與三郎を俄に詰め、藍玉屋へ乗込まうと子分に其の俄

を擔がせると、與三郎の血潮が依を染めて舞臺へ流れ落ちる。此の幕切の凄慘さには慄え上つた。

それ丈け玄治店は引立事は云ふ迄も無い、玄治店で多左衛門がお富に渡す守袋は次の幕の質店の場の件を盛込んだものである、それから此の場で藤八の懐ろを調べるのは大詰で與三郎が飲む毒薬を取る事と眞鶴の香爐に就ての海杭の松からの手紙を奪ふ爲めなので、木更津から源治店迄を見る豫備知識が必要だとしたら、與三郎の實父が眞鶴の香爐の紛失で難儀をして居る事と松五郎と藤八、多左衛門とお富が兄妹である事丈けであらう、此の與三郎は團十郎の當り役で、同優が平素門弟に『時代物の臺詞は世話に、世話狂言は大時代に臺詞を云へば間違ひ無い』と教えたと言ふが、彼の「しがねえ戀が情の仇……」のツラネこそ如實に示した臺詞廻しで誰れが演つても大概似たり依たりの口調は團十郎のが其のまゝ傳へて來て居るのだと云ふ事である、此の狂言の年賦や書卸當時の番附もある筈だけれど四世の方に保管されて居るので今お目かけられないのが残念である、大體此狂言は、日本橋八丁堀邊にあつた事實を之れも其筋への遠慮から鎌倉時代に持つて行つて大々的扮したもので、其の事實談も一寸面白い経緯があるが又の機會に……



芝居みまた



與話情浮名横櫛 (六月座)

木更津より玄治店まで

壽美多郎

木更津海岸の場 または見染の場とも云ふ、見染の言葉が示す様に、與三郎が、お富を見染る件である。

當時まだ與三郎は、伊豆屋の押しも押されぬせぬあと取り息子である、しかし義弟に家督を譲り度いために、自分は放蕩三味に身を持ち崩し現在では同じ木更津の藍屋善右衛門の所へお預けの身である。

そして木更津の濱見物に來たが、丁度この日土地の親分赤間源左衛門の妾のお富も多くの若衆や、近所の娘さん達に取り巻かれて、汐干狩に來て居た。

そして、二人は計らずも逢ふのだが、お富は、土地で飛ぶ鳥も落す勢ひの大親分の愛妾である。しかも江戸から遙々源左衛門

が連れて來た女だといふので、平常、親分のお陰を蒙つて居る濱の人達は、まるで御國主様でも來た時の様な歓迎振り……私共は不斷源左衛門親分のおかみさんとみさんの御内へ遊びに行く度に、色々な物を貰ふ故、今日此處へ、おかみさんがお出でなさんす前方に皆んなと言ひ合せ、御待ち申して居りますわいな……

濱の娘達は、蛤や、さびや、まて貝など拾ひ集めて待つて居る。「それに又、黒戸の濱の世話役手合が、近附きになり來た處、江戸から來て居る藝者手合が、うまく座敷をとりもつ故、ついうかくと長くなる奴さ。

濱の若衆達は、お富様のお成りが遅いの

をとりくの噂をして居ると、其處へお富はお針女お岸に日傘をさしかけさせ、雇婆や、大ぜいの子分を連れて出て來る。「是はまア仰山な、ぬしのすゝめに宛も此の木更津へ來てからは、是非一度はと云はんす故、よんどころなく濱見物、お前がたに此様なお世話をかけては氣の毒でござんすわいな……

お富は人々の仰山な出迎へに恐縮しながら、お岸に命じて用意の祝儀など與へた、あとは無禮講で、一同は濱の方へ引あげて行く。

其處へ、與三郎は丁稚の長太を併に、出て來るが、そのすぐあとから鳶の金五郎が追ひかける様子で出る。

芝居 みたまた

「もうし、一寸お待ち下さりませ、あなた  
は伊豆屋の若旦那那與三郎様ぢやござりませぬか……」

「お、おぬしは金五郎ではないか。

思ひがけない所で出合った。二人の間には、江戸の事が話題に登る、そして、江戸を出る前に、伊豆屋の義弟から頼まれた手紙を與三郎に渡す、そして伊豆屋の養子であるが統領と決つて居る與三郎が義理のため、心にもない放蕩はやめると忠告するが、與三郎は「義理といふ字を辨へる位なら親類中や両親にこんな厄介は掛けるものか」と取り合はない。



羽衣門の  
向坂屋の三郎

「俺もけふは遊びに来たのだ、そんなつまらない事を云つてふさがせるなよ、マア、そんな事はいゝにして、久し振りで、おぬしの顔を見て何だか江戸へ行つた様な心持だそこらで一口やらう」  
それから二人は丁稚の長吉を探しながら激見物もするつもりで、立ちあがる。  
二人は舞臺から假花道にかゝる。  
其の間に道具が廻る。  
海岸の場——羽織落しの場とも云ふ。  
與三郎が、お富に見とれて羽織を落すからこの名がある。

假花道から入つた、與三郎と金五郎は、道具が納まると、本花道から出て来る、同時に上手からお富の一行が出る。  
本舞臺で、二人はすれ違ひ、お富の一行は花道へ、與三郎は舞臺から。  
「檻に江戸の」

「そんならあれが」  
「噂に聞いた」

お富の附添のお丸とお岸は一寸不審がるが「いゝ景色だね」とお富に胡覽化されて入る。  
與三郎は見とれて居るうちに羽織がひとりでに脱げて落ちる。

左右正門の  
頭痛の安五郎



金五郎は、不審に思ひ乍らも拾ひあげて着せる、與三郎はあはて、裏返しに着るのが木の頭で金五郎も初めて様子を悟る……

幕

お富は和泉屋の大番頭多左衛門に救はれて、現在はこの支治店に圍はれて居るのだ

俄雨する日だ。

お富は女中のよしを連れて湯から歸つて来ると、其處に、雨に惱んで居る和泉屋の番頭藤八を見つける。

藤八は、朋輩の妾の家とは知つて居たが一度も来た事がないので、この俄雨の宿りを請ふのも躊躇して居た處だつた、しかし

芝居 みた ま

お富や、およしの言葉に、渡りに船と門をくぐる。

舞臺は廻り——いよく 支治店——

藤八は、見れば見る程美しいお富の美貌殊に湯上りのなまめかしい姿にやうやく魅せられて、女中に心附などやつて、酒の支度をして呉れと言つて出してしまふ。

然し、あからさまに、お富を口説く程の意気地もない藤八は、言葉をつくして、お富に言ひ寄らうとするけれど、お富と藤八の氣持には餘りに距離がありすぎた。

藤八がジレ氣味の所に、誰かしら表を訪ふ人がある。

藤八があはて、身をかくさうとすると、入口を忍ぶ様にあけて矢鱈に怒縮する男は、蛸蝠の安だ。

また何時もの押し借りである。

「何の事かと思つたら、その事でござんすか、せつかくのお頼みではござんすけれど、私にもしくいよつて、今日はお断り申します」

お富は、餘り度々の無心なので、取り合はうとしなかつたが、安は、兄貴分の與三郎が後押しについて居るので、さうたやすく

志守田郎の和傘の多き男



は引き下らない。

見兼ねて藤八が大いに男前を擧げつつも、りて仲に入り、幾等かを出したが、安は一寸中身を擱んで見て餘り妙いので、突き返した。

藤八は、安の押し強さに驚くばかり、お富は、餘り事を荒立て、隣近所の外聞悪いので、仕様事なしに、

「お前方にこれこれ言はれる筋はござんせぬ、したが、モウ、かれこれと面倒な言ひ乍ら、今度はお富が某かを包んで出す。

それを見た安は嬉んだが、ほゝ冠りのまゝ上りかばちに後向に坐つて居た與三は承知しない。

「たつた一百の金で踊る場所もありや、百兩百貫貫つても踊らねえ場所もあらア、爰の内の金の下の灰までもおれがものだからから俺が掛け合ふから引つこんで居る」

與三郎は立ちあがつた。例の人を食つた足どりにお富の側に寄つた。

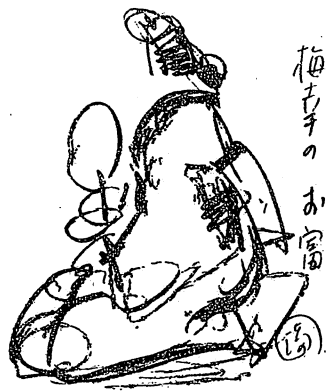
「モン、おかみさん、お富さん、イサヤお富久しぶりて逢つたなア」

「私をお富と知つての前はえ」

「見忘れたか與三郎だ」

「煩冠りをとつて、襦をはね、あぐらをかく」

梅七手のお富



芝居 日 末

大向ふから「待つてましたア」と聲のかゝる時、合方になり。

「しがねえ戀に情が仇……と例の名調子で、玄治店と言へば誰ても一件は口真似るツラネだ。」

「命のつなも切つたのを、どう取りとめてか木更津からめぐる月日も三年越、江戸の親には勘當請け、據るなく鎌倉の八ツ七合を喰ひつめて、つらに受けたる看

ばんの疵がもつてのつてふほふに、切られ興三と異名を取り、押かけゆすりも習ふより、なれた時代の源氏店、其のしらば

けの黒塚に、格子造りのかこひものは、死んだと思つたお富とは、お釋迦様でも

気がつくめえ、よくもおぬしやア達者で居たな、コウ安、これちや一歩ぢや歸へ

られめえ」様子を知つた安も、始めて、一步位の端金では歸られない事に気が付き、木更津の述懐から、旦那があるとき聞かしては戀を然に替

えて強談判である。そして、今の旦那は誰かと聞くが、旦那とは言ひ乍ら、救けられて足かけ三年唯の一度も色めいた事のない多左衛門の名は、さすがにお富の口からは言へなかつた。

興三郎と安は、藤八を捕へて責めるが、藤八は言葉巧に言ひぬけて、逃げ歸る。

「これからは、お富が相手だサア世話をする奴をぬかせ、ぬかしやアがれ」

興三郎が、お富に向つて詰り寄るとき、多左衛門が歸つて来る。

これで、梅幸、羽左衛門、幸四郎、友右衛門の顔捕ひ……

多左衛門は、皆まで聞かず、大方を悟つて興三郎には小判で四五枚出して渡し、兎も角此の場は引きあげて、その金を資手にして堅氣になつて、改めて来て呉れ……と物の判つた挨拶に、安は元より、さすがの

興三も黙つてと言ひかねて歸る。然し、お富に充分未練のある興三は、途中で安とは別れ、再び玄治店に引き返して来るが、内にも入りかねて、何れかへ姿を消す。

内では、妙な男に訪ねて來られて、ありつたけの無理難題を言はせたのも、皆自分故と、お富は、多左衛門に詰り居る。

然し、多左衛門は叱らうともせず、「向ふ疵とか切られとかと云へば、今世間で噂の悪い男だから今しばらく彼の心底も見届けその上でまた、する事もあらうから、と

もかく短氣を起すな……」と、親身も及ばぬ心づくし……

お富は、何のよしきもない自分に、さうして呉れる多左衛門の心の謎がなきたかつた。

「イヤそれは今は云はれぬ、おぬしの中から、だ、極りの付いた其時はいふて聞かせ

る」多左衛門の言葉を、お富はそれ以上追窮する事とは出来なかつた。

その時、店の使の權介が来て、急用が出来たからと言つて、多左衛門を伴つて歸る。多左衛門は家を出る時、守袋をお富の前に投げ出した。

お富はそれを拾ひ上げて、びつくり……多左衛門こそ、お富の實の兄なのだ。そして、お富と興三との戀は茲に完全に結ばれんとする。

幕



# 素 襖 落 長 唄 連 中

(おほむ石)

姫 太郎冠者、約束ちや物語りして聞かせい。  
太 是れは又迷惑て御座る。然らば屋島の扇の的  
をチト語るで御座りませう。  
扇を取つてよろしく住まふ。

イデその頃は元暦二年如月の中の八日の事なり  
しが。  
是にて正面の書割を左右に引割り長  
唄 離子出る。

唄 沖の方より尋常に、かざりし小船こぎよ  
せて、共に麗しき女房の柳、かさねに紅の  
袴着たるが立ち上がり皆紅ひの扇をば船の  
せかいに挟み立て陸へ向いてぞ招きたる。

竹 判官興市を呼び給ひ  
如何に興市あの扇の眞ん中射て敵に見物させよ  
かし仕つても存じ候へばあの扇射損するもの  
ならば永き味方の御弓矢の疵にて候ふべし一定  
仕ふずる仁に仰付けられ候ふべし。

竹 判官、聞くよりはツと怒らせて、  
今度鎌倉を立つて西國へ逝かんずる者共は皆義  
経が命に背く可からずそれに少しも仔細を存せ  
ん殿原は是より篤に鎌倉へ下るべし、左候は  
外れんは存じ候はゞ御説で候へば、仕つて見  
候はん。

唄 御前を立つて只一騎、濱へ向つてぞ進み  
しが。  
矢こそ少し遠かりければ海の面一段ばかりぞ打  
入たる。

唄 折しも春の夕暮に北風はげしく吹きけれ  
ば、機打つ浪も高くして船はゆり上げたり  
すへて漂ふ浪に扇さへチラチラチラとひら  
めいたり。

竹 沖には平家船を並べて見物す。  
唄 陸には源氏馬を並べて是を見る。  
何れも何れも暗れならずといふ事なし。

竹 興市は馬上に目をふさぎ。  
南無八幡大菩薩、突して我が國の神日光の権現  
宇都の宮、那須の温泉大明神、願はくばあの扇  
の眞ん中射させたばたまへ。

竹 射損する程ならば弓矢捨てて自害して人に  
再び面をば向はんべからず。  
今一度本國へ歸さんと思召ば此矢外させ給へよ

唄 心の内に祈念して目を見開いたりければ  
風少し吹き弱り扇も射上げに成りにけり。  
竹 へスワヤ此間と勇み立ち、鎗矢取つて押つ  
がひよつ引き兵と切放せばあやまたず一  
二ウトとぞいきつたり射きつたる。







京のたより

桂・田・曉・香

加茂川の堤に植えられた樹々の青さは、日増しに濃さを増して行き、四條通りのアスハルトを行く娘さん達の襟足が、くつきりと美しく目立ち、セルの肌ざわり心地よい六月はじめ、久し振りに、東京から高島屋がやつて來ます。

自由劇場時代の熱はなくとも、風格がそなはつて來た彼氏、時には「シラノ、ド、ベルジュラック」をやつて見やうと云ふ彼氏私は永遠に完成されない、何時迄も研究生の態度で進む彼氏の藝術を愛します。

今度の演し物では、何と云つても吾々の興味は「室町御所」と「大杯」にかゝつて居ります。

この二つの狂言は、久し振りで、芝居らしい芝居に飢えた吾々の心を満たして呉れるものがあると確信します。

「鳥邊山」は、あまりに知れ渡つた狂言で

あり、今更らしく私が茲に冤や角云ふ必要を認めません。

たゞえられた陳水の流れに、高島屋の旗幟が影を映す六月、吾々演劇研究生は恵まれる

卓月の終りから、水無月はじめにかけて、京都で生れて、漸やく獨り歩るきの出來るやうになつたエランヴキタル小劇場が、松竹座に「嘆きの天使」プロローグ、とも云ふ可き軽い芝居を公演します。

ストリーは誰の手になつたものかは知りませんが、なか／＼氣のきいたもの、國民座に居た深見恭三君が、キーパーの役を買つて出て居ります。

ウンラート教授は、松井君、壽三郎のウンラートを不幸にして見落した小生、松井君のウンラートは、ヤニングスのそれを良く寫し仲々の上出來。

佐賀知恵子さんのローラ、之又デイトリツヒの柄は無くとも、コケットな姿態で、教授

を誘惑するの技は、凡手では出來ないもの、ラストへいつて、パントマイムに、東堂君の名説明を附したなど、本物のウィリアムを彷彿させるものがあり、野淵氏の演出なかく味なものがあり成功!!

つゝしむきは色慾の道、男よ迷ふ勿れ、女のために……實演を見乍ら、スタンバークのおやじが、私達の耳許で囁いて居るやうに感じられます。

この實演「嘆きの天使」は、次の週には、神戸松竹座へ、そして太宰宣傳部長の靈筆によつて讀えられ、堀口解説主任のネオロマンチズムの洗練された名説明によつて、一段と演技は冴え、ステージエフェクト百パーセントの折紙がつけられるであらう天晴れ歌の名優ヤニングスに成り澄した松井茂男君よ、名花デイトリツヒに成り澄した佐賀知恵子さんよ、今後ともたゆまずみちつちりと勉強して下さい。

京極に、問題の（本當は、問題でも何でも無いが、宣傳文句にさうあるから其儘使ふが）女給、小夜子、君代、なるものが突如として現はれました。

私は一夜、此二人の厚顔無智さを見に出掛ける。

成る程世間で、問題にするだけに、顔だちは一寸見られる、が二人のお目見得の狂言な

るものを見て行く内に、私の心はずつかり憂鬱になつてしまふ。

何故と云ふに、私は二人の女の心境を考へたからです。

自分の暗い過去を小説に映畫にして世の中に晒し、それで猶ほ足らず、本人自身のこのこと舞臺に顔を晒す、そして得意然たるものがあるに至つては、金々々の世の中とは雖、頭が古いと云ふのか、私などには、考へられない事です。

私は此二人を、チャーナリズムに奔弄されたロボットと名付けたいと思ひます。

感情も無ければ理性もない——かう云ふ畸型兒を、時々近代の消費文化は産み落します諸君、哀れなる畸型兒のために、一掬の涙を流したまへ!!

こゝには、プロレタリア、イデオロギーもなけれ、シユウル、レアトズムもない平々凡々の喜劇を、平々凡々にやつて、それで居て大衆の望みをしつかりと握つて居る。そして「これでいゝのだ、遅れずに半歩前進主義」を標榜して居るかに見える家庭劇の存在、吾々は此劇團を見逃かしにはならない。

腕達者揃ひの此團體が、時々訪れて呉れる事は悦ばしい。

◇ 五月に此劇團を送つた、京都座は、六月に

久し振りで新國劇を迎へる。

久松の存在、金井、中井名演技、島田、畑中等の中堅を有つ此劇團も相當に魅力はあるが、英雄主義——ヒロイズムの劇團だつただけに、其黨首を失つて後の此劇團は、随分苦闘を續けて來た。

然しもうゆるがないところの地盤が出来たこれからの此劇團に残されたものは、如何にして、よき脚本を得るか、よき演出者を招くかの問題である。

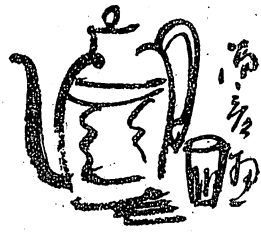
吾々は、まだ——此劇團を見捨てゝはならない。

今度お目見得に並べられた三つの狂言は、質に於て、或ひは、よくない(云ひ換へるならば)本格的でないにしても、大衆の心を掴むに、如何に腐心されて居るかは分る。再び云ふ此劇團を見捨てないで下さい。そして長い眼で、見て居て頂きたい事を、諸君とお約束した。

◇ 東山の峯を猛獸の如き入道雲が、走るの間があるまい。幹彦のやわらかい線で描かれた繪日傘が、四條の橋の袂にたゞずんで、川の面を眺め乍ら物思ひにふけるの日も目と鼻の間に近づいた。

今、祇園、先斗町、宮川町の藝者達の眞紅の唇を割つて出る言葉は、久し振りに訪れる高島屋の噓で持ち切りである。(五、三〇)

大野醫學博士  
乳兒に一番良  
パームオイル  
松竹石  
松竹石



# 人格の藝術

華水 生

猛烈な性慾描寫の流行する今日、崇高美と人格の關連を述べ  
るのは、或は時代錯誤と譏られるだらうが、我々が高橋君の演  
出を見る毎に痛切に感ずるのは、數千の名優互に覇を争つて居  
る中で、藝術家となる以前に立派に人間となつて居るのは此人  
一人のみでは無いかと云ふ事だ、

俳優に嚴格な道徳を求むるのは、職業がら幾分無理もあらう  
然し藝術が作家個性の表現である以上、俳優の人格は自から舞  
臺上の科白等に影の如く伴はねばなら無いので、第一流の藝術  
家たるには先づ高尚の人格を養成して夫を以て卓拔な技藝の素  
地とせねばなるまい。此點から考へると高橋君從來の修養は劇  
壇稀に見る所、鶏群の一鶴と評しても敢て誇張には過ぎはしま  
い。

夫には相當の論據がある、高橋君は名門の出でありながら、

只に物質的の成功に甘じない、潑刺たる意氣を以て絶えず清新  
な方面に進出して行く、海外に旅して大に見聞を廣めたのも、  
自由劇場を創設したのも、又歌舞伎劇の新演出を試みるのも、  
從來保守的な我奮劇俳優中で實に高橋君を濫觴とする、

山の如き種々の新計畫には、物質上成功の多少はあつたにも  
せよ、凡ての同輩が枕を高くして安眠を食つた間に獨り先鞭を  
着けた勇敢の意氣は世間の薄志弱行の徒を激勵するに餘あるで  
は無いか。

然らば何故に京都觀客の期待に背馳し、昨年も亦今年も亦  
南座の檜舞臺に於て、重ね／＼同一の作品を演出するのである  
か、茲には大なる矛盾があるでは無いかと、深い失望を感じる  
人も定めし夥しい事と思はれる。

そこで敢て辨護を試みる譯ではないが、茲に一つ認めねばな

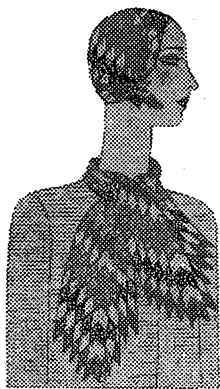
らぬのは高橋君の品性の内に、能く他と調和して行く謙讓の美德の存する事である。

世には新奇な意見を立て、只だ急激に突進し、單身孤立してまでも極左端まで偏倚する人々は滔々として至る所に之を見るのであるが、膽大心小、自ら進むと共に人を導き世に従ふと同時に敢て退かないと云ふ調和中庸の道を能く守るのは蓋し高橋君に於て獨り見ることが出来ると思ふ。

此の人格の反影は常に舞臺の上に現れ、臺帳原作の眞精神を寫し出し時々従來に見なかつた一種の様式を以て常規中の異例平凡中の意外を示し、且又時代思想の變遷をも陰約の裡に悟らしむる獨特の藝風が生じたのであらうか。

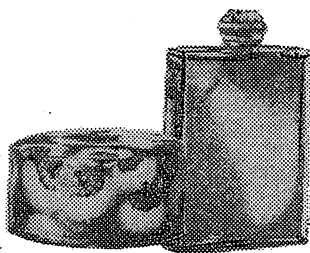
高橋君の飲すべき是等の人格は恐らくは一部分は先代の遺傳でもあらう、維新當時梨園界の濁浪中に獨り清節を持して、終に劇壇三傑の内に列した故人勇猛精進の氣象は、特に著しく其の語調に現はれ、三十年の後、尙我々の耳底に轟いて居る、劇が矢張り耳の藝術である以上——實際先代左團次の臺詞を聞いては誰しも存様信ぜねばなら無くなるのであるが——高橋君にも今少しありはりの工夫を煩はしたい、三九郎と上野とは同じ調子の内にも異つた味が添はねばならぬから、其だ望蜀の念ではあるが、故人の品格を追憶した餘りに其の口跡を想起し序に一言するのである。

佛蘭西  
コティ



COTY

香水各種  
粉白粉  
コムパクト  
其他化粧品





# 『室町御所』と『鳥邊山』

岡 本 綺 堂

高嶋屋一座が京都の南座へ乗込んで、「室町御所」と「鳥邊山」中」を出さうです。興行者側には何かの都合もあるのでせうが、どちらも餘りたびく出るので、作者自身ですらも又かと思ふ位ですから、見物側ではどんなに考へるでせうか。たとひ私の作を上演するにしても、何かほかの物がありさうに思はれますが——したがつて、餘りたびくのことですから、作について別に書くやうなこともありませんが、「室町御所」は大正二年九月本郷座初演、「鳥邊山」は大正四年九月本郷座初演、俳優の顔ぶれはいつも同じことです。

前者は松永久秀の謀叛、足利義輝の滅亡、すべて史實に據つたもので、別に新しい作意を加へてもありません。池田丹後が義輝を討つたときに、障子の骨で眼を突いた爲に盲目となり、結局乞食におちぶれて仕舞つたのも事實です。唯、丹後と松永の娘との戀愛事件はわたしの作意で、これだけは架空の談です。この作について歴々聞かされる世評は、第一幕と第二幕は蛇足で、最後の第三幕だけで澤山だと云ふことですが、それは芝居

を知らない人の議論で、第一幕から第二幕、第二幕から第三幕と、だんくに疊み込んで行けばこそ、最後の場面が引立つので、なんの豫備智識も無しに突然に第三幕を見せられたのではおそろく興味の半分を滅殺されるでせう。單に臺詞で説明したぐらゐでは、本當に呑み込めるものではありません。尤もこんなに度々上演されて、見物が大抵の筋を承知してしまつた曉には、あるひは最後の一幕だけでも濟むやうになるかも知れません。後者はお染半九郎の情死を取扱つたもので、この情死事件については種々の異説もありますが、私は先づ普通の傳説に據つて筆を執つたのです。私はあまり義大夫を入れた戯曲をかいたことは無く、このほかにはお園六三の「浪華の春雨」があるだけです。かう云ふものは甚だ不得意ですから書かないのですが、それがまぐれ當りで杏花十種に編入され、又かと思ふほどに上演を繰返されるの不思議です。

その他のことは皆さんも御存じ、唯ほんの責塞ぎにこれだけのことを——。

(五月廿四日)



額田六福作・徳田純宏演出

巷説 釣天井 四幕 九場

—六月の角座—

不遇な駿河大納言に同情し、四代將軍に擁立しやうとしてゐるからです。末席に侍つた家老靱負はこれに斷然反對し一同の家臣は退出して行きます。

1

寛永十年の春——三月のある日、武州熊谷の宿はづれの街道筋を  
高崎の安藤家へ預けられる三代將軍家光の弟、駿河大納言忠長が網乗物に乗せられて通り過ぎられるのでした。  
宇都宮本多上野介は供頭安藤大學の情によつて、お目通りを許されます。

「上様」  
上野介はやつれはてた、忠長の姿を見守つて、何事か曰はんとするが、唯落涙するばかり  
やがて、その乗物は遠くに去つて行きます。上野介は不安氣に眺めてゐるのは家老の河村靱負だつたのです。

2

宇都宮城内の廣間。多くの家臣のものが重苦しい氣持で、互に顔を見合せてゐるのでした。彼等は主君密々の御説をたまはつたのです——その密々の御説とは……

日光東照宮へ御親拜の三代將軍家光を暗殺することなのです。それは明かに幕府に對して、叛逆であり謀叛です。  
上野介がこうしたことを密かに決したのはその後で、上野介と靱負はしばし顔を見合せて居ましたが、やがて何事かを語り合ふのでした。

3

醜を百世に傳へるとも、家光暗殺を二人は密かに劃てるのです。  
庄屋惣左衛門の離れ座敷。  
家光宿泊の寢所湯殿等の普請に召されてゐる

る大工の興四郎と庄屋惣左衛門の娘お早とは戀仲だつたのです。お早は興四郎が城内へ召されてから二十日餘りにもなるのに、歸つても來ず、便り一つよこさないで、審しく思つてゐるのでした。

その矢先——興四郎は親方の情で、城を抜け出し、お早の許へ來たのです。そうして、今度の御普請の審しいのを物語るのです。惣左衛門が二人の前に姿を見せて、上野介は公儀へ謀叛、その普請をしたからには、何れにもせよ命はないから他國へ逃よと言ふのでした。

然し、興四郎は自分一人だけが生きちや居られないと、母親おまきのことを頼み、再び城内へ歸つて行きます。

4

宇都宮城内普請小屋  
頭梁の勘太夫が、小頭佐太郎を初め普請に來た一同を集めて興四郎を城外へ落ちのびさせたことを詫びて居ます。一同は深い憂ひに閉ざされてゐるのでした。  
と、この夜中、不意のお人調べ、勘太夫を除く一同は曳かれて行くのでした。その後へ

興四郎が戻つて來ます。勘太夫は首び、興四郎を逃がさうとする刹那、家老の靱負が、これを知つてこれを止めるのでした。  
やがて、興四郎も多くのこの普請にたずさわつた者は、衣れにも殺められてしまひます。  
上野介も自らこの場へ來て、靱負に事の首尾は如何にと問ひたゞす折柄、馬廻りの原森之助が上様、かねて豫定通り、今朝五つ時、古河出立に相成りましたと傳へるのでした。

5

日光街道筋石橋宿本陣  
庄屋惣左衛門にとる手段は唯一つしかかなかつたのです。  
直訴

そう願裡にひらめくとこの本陣に駆けつけて來たのです。そうすることは、殺された興四郎初め多くの者への仇討であつたからです。幸ひにして、その日の先拂ひ、松平越中守に逢ふことが出來ました。懐にした訴狀を出す惣左衛門……  
それを靜かに讀み終つた越中守は事なげに、取るにも足らぬことと引裂いて了ひます。

その事實を言ひ張らうとしますが、諍いとばかり、引下らせます。然し何故か越中守は悄然と歸つてゆく惣左衛門の後を家來の三五郎に追うてゆかせるのでした。

6

石橋宿西はづれの松並木の茶店の前で、お早と乳母のお賤が不安げに父の歸りを待ち詫びて居ります。その折惣左衛門が、訴狀は取上げにはならなかつたと悄然引返して來ます跡を追つて來た三五郎は惣左衛門に何事か聞いたとさうとした折、突然松並木の邊りに鐵砲の音……  
それは、靱負一味が家光の行列を襲ふたのでした。

惣左衛門は亂れた行列のなかに飛び入り、再び、上訴を企てるのです。やうやくそれが希つた折、靱負の手で、娘のお早は殺められておました。  
河村靱負——父さん私の仇も取つて下さいと、言つたきり、お早は息絶えてゐるのでした。

7

石橋本陣奥廣間



家光を初め井伊掃部頭、井上主計頭、松平越中守、その他大勢の家臣が居並び會議半ばです。

宇都宮城上野介の逆意をはつきり知るとその豫定を變更するのでした。この折又、以外な知らせが達します。

その知らせは——  
 忠長が自害したといふのでした。  
 弟を見殺しにする兄が是か、兄に殺される弟が非か、その批判は人の心まかせと恠しく眩く家光。

そうして、今宵は假の宿に夜もすがら弟のために祈るのです。

一同の家臣は暗然となり、涙をのむ、遠くから鐘の音がかすかに……。

8

宇都宮城大手前玄關前  
 事は已に破れたのです。

上使として乗込んで来た越中守は——上野介に山形城受取りを申し付けるのです。

自分等の計企が破れたことを知つた上野介  
 靱負は然し、少しも動じません。

越中守が去つてゆくと、一同の家臣は上野

介の周圍に取纏るのでした。

血祭りだ！  
 先づ彼を斬らう、事は已に破れ申したぞ、  
 傍の靱負が叫びます。

然し、上野介の心は平靜でした、これ程の大事を思ひ立ち乍ら。かくまで静かな終りを見せることゝは、又後世の語り草であらうと馬の用意をさせて、山形城、受取りのため出發してゆきます。

9

宇都宮城奥御殿  
 越中守は檢分に名をかりて亂入して來ます。

それを防ぐ、本多家の家臣——しばしの間亂闘が續きます。

途端、室のなかゝら、濛々たる白煙、越中守がためらひながらも、檢分せんとして入らうとするを、河村靱負が腹を切つてまろび出るのでした。

失火の申辭に切腹仕つた。  
 靱負は罪を一身に引受けたのです。  
 失火でござる。失火でござる。……。

士學博士 介一上白

造血 菓子

牛の きも から 精製した 營養分を 豊富に含んだ 一九三二年式 の營養菓子

10.60  
1.00  
3.60

ルーポール



## 顔の女彼



枝 菊 上 尾

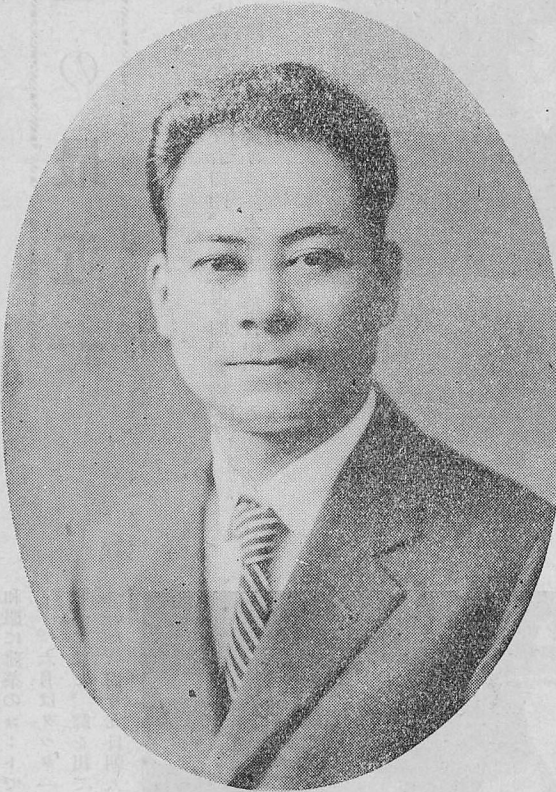
彼女が、もしも女優でなかつたとしたら？——でもかまはない。彼女が麗人であるといふことに於て何等變りはない譯だからだ。では、何處に麗人としての讚辭をおくる所以のものがあるか？

一九三一年型といふには些か繊細な感があつて近代人の愛好する所謂スポルテイクな健康さは不足だが、彼女の人の純日本的な明朗と、そして純日本的な聰明とは、茲に言ふ一九三一年型を遙に凌駕して尙あまりあるまでの好感を持たせる。

乃はち、彼女の明朗と聰明はその繊細な非近代性を十分に抹殺するエスプリとなつてゐる。それに彼女の外貌から推される透明な理智！その理智も一度戀を得んか忽ちよき情熱に激化するであらう。

まことに、純日本的な、それでゐて超時代的な麗人である彼女よ！ 脚光の前に永久にその青春を保て！

## 顔の彼



中 田 正 造

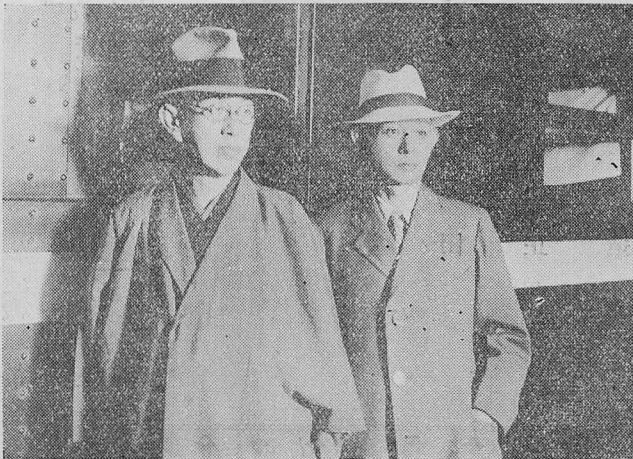
シーク！ 皆さん、いきだとかしやれてるとかそんな風な意味に早合點をしてはいけません。  
シーク！ 乃（みな）はちアメリカンデアン（アムリカンデアン）の會長（くわんちやう）！ これです。  
「美男（びなん）」であるか「醜男（しうなん）」であるかが、單（ただ）なる經濟（けいぎ）的（てき）な條件（じょうけん）では決定（けつてい）されない今日（こんにち）！  
テロ（てろ）的（てき）な今（いま）の時代（じだい）では、このシークが乃（みな）はち美男子（びなんし）である必然（ひつぜん）性（せい）を生（な）じて來（き）る様（よう）です。さう考（かんが）へながら彼（かれ）氏の（し）寫真（しやしん）と睨（にら）めつこ  
をしてゐると封建（けんけん）時代（じだい）の所謂（しゆゐ）美男子（びなんし）であるところのノツペリ型（がた）を遙（はるか）に凌（しの）ぐイミシン（イミシン）なイット（イット）とよきユーモア（ユーモア）を發見（はつけん）することが出  
來（き）ます。彼（かれ）氏の（し）外貌（がいぼう）から享（た）けるシークな感（かん）じは、直（ただ）ちに彼（かれ）氏の（し）性（せい）格（かく）の上（うへ）にも當（あ）て飲（の）められるでせう。どんな喧嘩（けんか）の中（なか）にでも平然（へいぜん）  
と泰坐（たいざ）してゐるであらうとこゝろの彼（かれ）氏が（し）想像（さうぞう）されるではありませんか。

## 劇壇の最近

珍しい顔合せの寫眞でせう、  
右から、松本幸四郎、尾上梅幸、大谷友右衛門、市村右衛門の諸優です。  
そして、この寫眞は中座三階ホールに於ける「玄治店」稽古中の一スナップ  
です。



和服に薄茶のコートで女形らしく二人共夫人同伴  
——。六月はタツタ一人大阪居据りの長三郎も出  
迎へて居た、驛を出て一行は甲子園ホテルに落ち  
ついた。尙廿九日朝八阪を素通りにして備前の金



廿九日午後五時二十分梅田着の市村羽左衛  
門、尾上梅幸



### 梅幸羽左乗込み

友右は下から幸四は上から

中座六月の松竹合併記念興行に出演する羽左衛門、梅幸はさる九日午後五時二十分梅田着のツバメで来阪、兩優とも昭和二年中座三月興行以來四年振りの大阪入りで、此度は一番目「渡海屋」は幸四郎の知盛に付き合ひ義經と典侍の局に廻り兩優顔合せとしては中幕の「かさね」と二番目「與話情」で折紙附の舞臺を見せて居る羽左衛門は洋服にパナマ帽といふ輕裝、梅幸は



光様に參詣した大谷友右衛門は午後十時三分の上りで梅田着、これと二分違ひで東京より松本幸四郎来阪。

廿九日午後十時二分梅田着の松本幸四郎、大谷友右衛門、大谷廣太郎。

# 劇壇往來

東西松竹  
合併統一記念興行大歌舞伎

五月三十一日初日  
毎日午後三時半開幕

【狂言】一番目「義經千本櫻」二幕渡海屋より大物浦まで・中幕かさね與右衛門「色彩間苜豆」清元延壽太夫社中・新歌舞伎十八番の内「素襖落」長唄囃子連中・二番目三世瀬川如卓作「世話情浮名横櫛」二幕・大喜利「奴道成寺」常磐津連中、長唄連中【配役】源義經、百姓與右衛門實は小姓久保田金五郎、伊豆屋與三郎後に向疵の與三(羽左衛門)入江丹藏、太刀持鈍太郎(長三郎)武藏坊辨慶、番頭藤八(剛右衛門)お竹實は竹の局、お針女お岸、觀音坊(羽三郎)常陸坊海蔵、百姓麥六、五柳亭相生、圓心坊(梅助)子分銀次(菊四郎)濱の娘おさん(梅之亟)龜井六郎、僧西念、子分梅藏、蓮華坊(力藏)梅の局、三郎吾、濱の娘お市、鐵心坊(延太郎)駿河次郎、次郎冠者、金剛坊(駒之助)子分金吾(紫若)伊勢三郎、子分

伊八、念珠坊(橋之助)濱の娘お濱、遍照坊(梅太郎)丁雅長吉、信念坊(廣太郎)お松實は松の局、姫御寮、女中およし(梅朝)銀平女房お蝶實は典侍の局、興右衛門女房かさね實は奥女中かさね、赤間妾お富(梅幸)相摸五郎、大名某、鳶の金五郎、蝙蝠の安五郎(友右衛門)下女おかね實は楓の局、女房おくら、濱の娘お半、悟道坊(高麗雀)片岡八郎、捕手、飯沼子分竹藏、四方坊(高麗五郎)下女お六(三四郎)子分銀八、紫雲坊(大七)海上運平、茶店のおとら、所化彌敷坊(錦四郎)渡海屋銀平實は新中納言知盛、太郎冠者、和泉屋多左衛門、白拍子花子實は狂言師右近(幸四郎)

## 更生... 新聲 劇 六月公演

五月三十一日初日  
晝夜二回開演

【狂言】第一徳田純宏作野淵親演出「女性の叫び」三景。第二額田六福作徳田純宏演出「巷説釣天井」四幕九場【配役】大工與四郎、大老井伊掃部守(辻野)普譚奉行藤田誠太郎、老中土井大炊守(小波)ジョッカーの部下、小姓西崎金彌(原)酒場の主人、牧田三五郎(中澤)家老河

## 新喜劇

### 松竹家庭劇 お目見得

浪花座  
五月三十一日初日  
晝夜二回開演

【狂言】第一「検査濟」一場。第二「お骨の居候」二場。第三「農村の横顔」一場。第四「新妻盛衰記」一場。第五「お祖母さん」三場【配役】息貞二郎、大村彌七、お祖母さんおきん(千吾)法科學生三浦、作男善助、前田陽太郎(天外)田村彌兵衛、小谷賢一郎、松井源兵衛(十次郎)伯父常永、書記石川、手代鶴吉(三樂)妻おすみ、車夫寅吉(天照)醫科學生岡田、訓導飯島、伴源吉(三郎)商人井上、弟勘助(致雄)印刷屋中西、養父新二郎(二郎)

工科學生關口、夫國本、田舎者彌助(富士島)會社員牧野、酒屋寺田(鐵彌)黒田の妻お秀彌七の次女廣子、源吉女房おかつ(春野)妹きぬ枝、藝妓濱勇(石井)お針子由子、妻久子(如月)ある婦人、妻百合子(春日)伯母おます、下女おまき(濱地)お針子おま、女學生須磨子(村田)文科學生長澤兄忠夫、銀行員田中(賀川)實業家黒田、父惣兵衛(小織)

文樂座人形淨瑠璃

五月三十一日初日  
毎日午後三時開幕

〔狂言〕前「加賀見山蓑錦繪」草履打の段より奥庭の段まで・中「紙子仕立兩面鑑」大文字屋の段・次「御所櫻堀川夜討」辨慶上使の段・切「義士銘々傳」赤垣源藏出立の段

〔太夫三味線劇〕草履打の段岩藤(文字)尾上(島)つばめ、南部(善六)長尾、貴鳳(腰元(文)腰元(辰)長子、陸路)糸(勝市)若之助友造)廊下の段(綴、新左衛門)長扇の段切(土佐、吉兵衛)奥庭の段、岩藤(相生)お初(和泉、島)安田庄司(鏡)忍び(綴、源路)腰元(千駒、播路、龜久)糸(歌助、友

之助、友市)大文字屋の段中(駒、重造)切(津、友次郎)辨慶上使の段中(相生清二郎、つばめ、猿太郎、南部、吉彌)切(古靱、清六)源藏出立の段切(大隅道人)〔人形劇〕草履打の段、局岩藤(政龜)中老尾上、榮三郎(鶯の善六)光之助、廊下の段、伯父彈正(玉幸)局岩藤(政龜)召使お初(文五郎)長扇の段、中老尾上(榮三)召使お初(文五郎)奥庭の段、局岩藤(政龜)召使お初(文五郎)忍び、(玉松)安田庄司(紋十郎)大文字屋の段、大文字屋榮三郎(玉次郎)娘お松(文五郎)手代忠兵衛(市松)下女おたま(文五郎)榮三郎母(玉七)萬屋助右衛門(小兵吉)手代傳九郎(玉松)手代權八(榮三)辨慶上使の段、卿の君(紋太郎)侍從太郎(門造)妻花の井(扇太郎)女房おわさ(文五郎)腰元しのぶ(文作)武藏坊辨慶(榮三赤)垣出立の段、赤垣源藏(玉松)下男惣平太、玉市)女房おつき(紋十郎)母貞弓)小兵吉)兄源左衛門(政龜)

市川左團次大一座

南座  
五月三十一日初日  
毎日午後三時開幕

〔狂言〕一番目岡本綺堂作杏花戯曲十種の内

内「室町御所」三幕。小品舞踊「踊る時代風景」三場島居言人舞臺裝置花柳壽輔振付中幕河竹默阿彌作「大杯鵬酒戰強者」一幕。二番目岡本綺堂作杏花戯曲十種の内「鳥邊山心中」一幕。大喜利坪内博士作竹屋榮藏作曲「變化雛」長唄雛子連中竹本連中〔配役〕池田丹後、足輕才助實は馬場三郎兵衛、菊地半九郎(左團次)多門、藝者おまつ、紺屋のおろく、若松屋のお染(松島)大館岩千代、内藤家用人平岡、雄猫、延升)伊賀七郎、足輕頭、お染の父與兵衛(村右衛門)落合彌市、一色淡路、笛吹き男、足輕丸郎藏(米左衛門)高木左近、足輕四郎助、若黨八助(剛次郎)生駒甚作、近臣小田川清(延十郎)侍女楓、嫗おでん、花菱屋の仲居(蓮若)清川源八郎、近臣太田(芝右衛門)僧良念、近臣宮森傳鶴)花寶娘、小姓、仲居(小傳次)鼻山次郎、小姓、仲居お雪、鼠(左近)森傳助、近臣、鼠(壽美五郎)花寶娘侍女夕顔、仲居(壽美若)侍女卯の花、仲居(美鶴)侍女、仲居(鶴太郎)和田右京、近臣飯田、鼠(松三郎)酒屋の丁稚、鼠(左喜丸)一來法師、雌猫(千代磨)愛妾(成太郎)岩槻主水助、蛇遣ひの女、遊女お花、女雛後にモガ(芝鶴)松永彈正、阪田市之助、非人頭興兵衛、筒井淨坊明秀、内藤紀伊守(調子)足利將軍義輝、井伊掃部頭、男雛後はモボ阪田源三郎(壽美藏)



# 漫談 歐米の旅



筒井徳二郎

## 外國元竹の刀で武者修業

大洋丸は觀音崎の鼻を出ると急に速力をはやめた。願れば夕空にクツキリと浮出た富士！それは私等を見送つて呉れるの？繪の如に美しい姿も今がもう見納めに成るかも知れぬと思ふと、未練にも去り難い氣がして……と云つた處で今更降りの譯にも行かないが、名残り惜しさに涙さえ出る。伊豆函嶺の山は既に潮風に煙つて、いつか船は夜の海へダングンと乗入れて行く、月が上る、何と靜かな清々敷さだ夜の潮風が針で打つ如に痛い、然し私は突然縛めを解れた囚人の如に、グツタリ藤椅子に掛けたまゝ、動く氣力も失つて居た、出發當時の横濱埠頭の雑踏、觀送つて呉れた誰彼の顔、激勵の言葉！そんな事が次から次へ幻影と成つて現れたり消えたりする、そして又歸朝する日の花々しい光景！空想はそれからそれへ歡喜して走つた、然し待て！其處にうまく問屋が卸すか、第一も

う一度此の海を渡つて無事に歸る事が出来るのか。洋行！なんて痺れ藥をかきされて少し氣が變に成つて居たらしい私は今、此の洋上に氷の如な冬の夜の潮風を溶びて始めて心の平靜を取り戻すと、どうも出發前の考へが餘り馬鹿々々しかつた事に氣がつくと同時に前途が誠に不安に成つて、寧ろ不用意に船へ乗込んだ事迄後悔し出した。臆私は飛でも無い喜劇役者だ、此の洋行の結着は一平漫講の敵討か、竹の刀の武者修業、勝敗のほど甚だしく心細い。

桑港埠頭に於ける私達一行の歡迎は迎も素破らしいものだつた、私は忽ち群衆の重圍に落入つてヘヤモンドホテルに投げ込まれる迄全く夢心地であつた、ホテルでも新聞記者の訪問に應接間に縛りつけられて居たがやつと解放されて見ると自分の部屋が分らない、尋ね如にも言葉は通ぜず、通譯は歸つた後だ、私はベソを掻きながら三十分以上も廊下をウロウロしなければ成らなかつた、畏れ多いが



伏見宮殿下が御投宿に成たのも此のホテルであつたと云ふだけでも如何に上等で宏壯完美なホテルであるかと知られよふ此の老たる迷ひ子は氣の利たボーイが通りかゝつて七階の私の部屋へ送り届けて呉れたが、此の時教へられた部屋番號が八百八十、七階の八八だ、是れなら忘れる筈が無い

ローサンゼルスへ乗込だのは翌朝で驛頭は桑港にも増して盛大な歡迎人が居たチャブリンが花輪を呉れる、市廳舎にボーター市長の訪問、大和ホールの招宴、フライデーモーニング俱樂部の茶宴。放送、午餐會、晚餐會、夜會等毎日々々お祭り騒ぎだ、一週間後に開演する筈のフキガ口劇場の表口には既に私の寫眞の這入つた大きなポスターが出て居る「日本を代表する一流の名優筒井徳二郎出演」と、開た口が塞がらない、成程名優であればこそ是れ程の歡迎もして呉れたのだと始めて氣づく



一ポツコ・クツヤジ者作の「家たれ生」(てに屋樂ロカビルトアテ里巴) 井筒と

「自分には決して其つものに成つたのでは無いが」の儘で初日を開けた、イヤ迎も素晴らしい人氣で芝居は毎夜満員を續けた、其處で私も良い氣持に成らざるを得ない

メリーやフエアバンクも来て貰つて呉れる名優益々つけ上つて、一番何の狂言の何處が良かったと質問したらバンクス小首を傾けながら「どれも良かったと思ふ」と云ふのだ、私は更に狂言の筋は米人に向くかと尋ねて見た、するとバンクスは當惑さうに、向くも向かないも米人には全然分らないのだ」と云ふ答へである、名優忽ちギヤフンだ。恙うなるも毎夜詰め掛けた見物は猿芝居を見る様なつもりで私等に接して居たのかも知れない。

何ともくすぐつ度感じがして私は逃げ出し度さへ成つた、然し幸ひな事にポスターは横文字の英語だから私には讀めない、だから良心の苛責もそれ程で無く、

「自分には決して其つものに成つたのでは無いが」の儘で初日を開けた、イヤ迎も素晴らしい人氣で芝居は毎夜満員を續けた、其處で私も良い氣持に成らざるを得ない

メリーやフエアバンクも来て貰つて呉れる名優益々つけ上つて、一番何の狂言の何處が良かったと質問したらバンクス小首を傾けながら「どれも良かったと思ふ」と云ふのだ、私は更に狂言の筋は米人に向くかと尋ねて見た、するとバンクスは當惑さうに、向くも向かないも米人には全然分らないのだ」と云ふ答へである、名優忽ちギヤフンだ。恙うなるも毎夜詰め掛けた見物は猿芝居を見る様なつもりで私等に接して居たのかも知れない。

私等は急に狂言の立替をしなければ成らなかつた、伊藤道郎君等は種々と腦をひねつた。早川雪洲君も意見を聞かして呉れた、そして稽古を米人に見せて解釋をさせて見たりした結果、大石と戀の夜櫻を一緒にしたり、忠信の道行が三分間で行はれたりする如に成たりした。

紐育はブースセアターを一週間、ロキシーセアターに代つて二週間、其間「影の力をトキー」に撮影したりした、若し此の紐育で失敗したら私達は契約の三ヶ月を経たない間に非常な御難をする處だつたが、幸にも此の奥行で幸運を擲る事が出来たのである、始めは「影の力」と勸進帳……と言つた處で安宅を言謂劇化したものだ……と左甚五郎等を見せたロキシー劇場では、此の劇場に居る二百人の踊り子が應援の爲め出演して呉れる事になつたので、戀の夜櫻は愈レビユー化してしまつた、そして著しい出来事はこれが鞍當であつて尙且つ忠臣蔵の七段目に成るのだから奇妙である、人氣は前の

ブース劇場よりも上々で一週の約束を更に一週日のべした程であつた、此のロキシー劇場は建築費千五百萬弗即ち邦貨三千萬圓と云ふトンデモ無い金がかつて居る丈け宏壯な事に於て設備の完全な事に於て殆んど世界一では無からうかと思はれた程である、定員は六千名だが、此の觀客が暮合、一度に散歩の出来る廊下休憩室、喫煙室、及び全數の人を容れ得る大食堂、其他小食堂、中食堂、化粧室等があるのだから劇場内には優に二萬名以上を入れる事が出来る、更に觀客の急患に備へて、場内に十幾つの病室と二十ヶの寢齋を用意した病院が有て三名の醫師と八名の看護婦が常務して居るのだから驚く、實に行届た設備だが餘り行届き過ぎて私は飛でも無い眼に合された、それは開演中座員の辻が行衛不明に成て舞臺を混亂に落し込んだ、八方搜索した結果二日目に成て漸と分た處が彼は入院して泣つ面をして居つたのだ、理由は舞臺で膝を少し擦りむいたのだが座付のダンサが

見て醫者呼んで呉れた處が、馳けつて醫者と看護婦がズン／＼入院させて仕舞たので、彼は頻りに歸して呉れと頼んだのだが言葉が通じ無い爲め其のまゝ、留置、全く留置である、私は早速隨員を交渉したが俳優組合の恩惑を恐れて輕傷者でも大事に扱ふ習慣に馴れた此の醫者達は容易に歸しては呉れずとう／＼巴里へ出發する日迄無病の病人は入院を續けて居た。

× × ×  
巴里のピカル劇場は、近代建築の粹を極めたと云ひ度程氣が利て居て新しい、眼に見得る處の大部分は大理石とガラスで、ガラスのある處必ず中に電氣が燈き光線の調和を計つて種々な色の電氣が混然と輝いて居る、舞臺の間口は八間に過ぎまいが、舞臺總面積は二十間四方は大丈夫あらう、そして其舞臺には二つの舞臺を同時に飾つて巴型に入れ替へると云ふ仕掛けである、そして此の舞臺は天井にも上れば地下室に納るのだから幕合な

んかてんで無くともよく、働きたい、事も實に素的だ。定員は三千四百から、四千位か、シートの具合、廊下を飾る彫刻や繪畫、流石は美術の國だなと思はれる。ロキシ一の観客本位なるに比べるとピカルは舞臺本意だ、そして前者の弗に光るに比べて此方は何處迄も意匠的であり美術的だ、私の興行は前後類例を見ない盛況を此處に揚けたと同時に或る反響を意識した、それは我々が心行く迄熱演した時、必ず言葉の通じない彼等にも通じるものがあると云ふ事である、此の時の成功が前後三回迄巴里に開演せしめたのだが、何より感激したのは有名な作者ジャック、コッポー氏に招待され、通譯なしで語り合つた事だ、と云たら私が佛蘭西語の達人？と思ふ人は斷じて無からうが、向ふが日本語が出来るのでも無いコッポー氏の云ふには、人間はお互に誠意を以て語らうとする時はたとへ言葉は通じないでも其のお互の意の有る處は必ず判るものだと言ふのである、彼は私の

芝居を四日間續けて見て、そして五日目からは樂屋を研究しはじめたのだ、未だ三月のうら寒い時分などで、私等は偶然にもいかに寒い處は見せないで済んだが、慥に飛んでも無い研究者が居るから油斷が出来ない、彼の云ふのは日本は慥に美しい芝居があるのに何故日本人は厭な

近代の泰西劇を真似するのだらうと云ふのだ、そして芝居は繪畫美と動きと會話とにある筈なのを近頃の佛蘭西劇は此の繪畫美と動きを忘れて只言葉にのみ走つて居ると貶して、燦んに日本劇を賞めて呉れた。

## 道頓堀 讀者募集

僅々三圓三十錢で面白い『道頓堀』が一ヶ年讀める

皆様の御聲援と御支持とに依つて益々隆昌に赴きつゝある本誌は、昭和六年を期して茲に新なる飛躍をせんとしてをります。

就きましては、此際皆様の御愛顧を賜つて一層の發展を遂げたく本誌は大々的に豫約年極の愛讀者を募集することになりました。本誌を御支持下さる皆様は是非振つて御如入下さることを伏して御願ひ致します。

特に左記のやうな年極の讀者特典を設けてありますからなるべく小爲替の書留にて御拂込み下さいまし。

豫約者 一ヶ年分 金三圓三十錢也 (郵費用一割増)  
 同 半ヶ年分 金一圓六十五錢也

特典 豫約にはすべて送料が免除してあります。豫約讀者は本誌主催の凡ゆる會合催し物に無料若しくは割引を以つて出席することが出来ます。特別號も特に普通値段の割になつてをります。その他皆様の御満足せられる幾多の企てが澤山あります。

本誌愛讀者は一人残らず豫約者になつて下さい



伯林より特信

蝶々夫人を觀る

好劇子

(ベルリン第一信)

私は、ベルリンの市立歌劇場で、蝶々夫人を聞いた。觀客席を見廻すと、殆んど満員だ。蝶々夫人が、如何に通俗的に知れ渡つた歌劇であるかを思はしめる。而して、この事は日本でも同様である。尤も、不幸にして我々は、一つの歌劇場をも持たないのであるが、(日本歌劇の演ぜられる歌劇場は、堂々たるものが幾つもある) 少くとも蝶々夫人の名前だけは多くの日本人に知られて居る。見渡す所、日本人の顔も大分見える様だ。私は、劇場で日本人に會うのは今日が始めてだ。珍らしいことである。

開幕第一場は、長崎郊外の風景である。尤も現代ではない。筋書きには現代としてあるが、五十年前の前のことだ。大多數の歐洲人が、現代日本を恐ろしく古く解釋して居つて、今でも、袴の侍が籠で通つたり、振り袖や、ち

よんまげがうろ／＼して居る様に考へて居るのは、我々に取つては甚だ滑稽である。我々も實は、そうしたのんびりした古い時代をなつかしく思ふが、今では、そんな気分は殆んど無くなつて仕舞つた。到る所に汽車汽船が通り、どんな山の中でも、自動車影を見ない所は無い。其他、飛行機、飛行船、ラジオ等。それ所ではない。農村問題、階級闘争、利己的個人主義、不幸にして失業問題迄、あらゆる現代文化の諸相は、善いにつけ、悪いにつけ、悉く現代日本によつて所有せられて居る。實に我々は、今歐洲人が惱んで居ると同じ悩みに苦しみつゝあるのである。現代歐洲の文明は、絶東の孤國、櫻の島をも征服し盡した。五十年來日本の歩んで來た道。その變化。それは唯に歐洲人にとつて謎であるのみならず、我々日本人それ自身に取つても亦一つの驚異である。我々の過ぎ來し方は、

同封の第一信(上掲の特信)は、蝶々夫人の劇評でありまして、これは、もともと、當地ベルリンの一新聞に投書致しましたものと、殆んど同じ主旨でありまして、元來當地の獨乙人に讀んで貰うために書いたものでありますが、日本人に對しても、又大いに興味のある事と存じましたので御送り致しました。尙ほ、讀者のうち、蝶々夫人を未だ知らない人のために、特に、終りにその梗概を付け加へて置きました。又、私が、當地の新聞に出しました論文を、お笑ひ草に迄、同封して、差し上げました御掲載は、都合によりまして、匿名にて唯好劇子なる名前のもとにお願ひします。

三月廿四日

在ベルリン

好劇子

考へて見れば全く夢だ。

舞臺の景色は、櫻の花盛りで、左手に、茶屋らしい家がしつらへてある。その屋根が神社の屋根の形であることや、又背景に富士山が聳かれて居たり（長崎からは富士山は見えない）することは、我々には異様に感ぜられる。その他、細かい點に於ては——殊に服裝に於て——多くの錯誤があるが、しかし乍ら、私は、そんなことは問題にいたくない。要は、全體としての日本の、而して、五十年前の日本の氣分を出すことにある。而して、この事は全く成功して居る。私は、淡い郷愁らしいものをさへ感ずるのであつた。（侍女鈴木木の服裝は、全く日本の服裝とは異なつて居るが、それにもかゝはらず、充分美的に見られた。舞臺上の裝置が著しく主觀的に取り扱はれて、實際の風景とは甚だしく異なつたものであり得る様になつた今日、服裝だけが忠實に寫實的でなければならぬ理由を、私は見出し兼ねる。服裝も亦藝術家の理想に従つて、相當自由に創意されて然る可きではなからうか。）

長崎は、日本々部の西の果て、即ち、九州島の西岸にある港町で、日本では、最も古くから歐洲に知られた町の一つで、人口廿萬を有し、今では九州島第一の都市ではあるが、しかし年々、位置があまりに西に偏して居る

ので、位置と地勢の關係上、その繁榮は寧ろ過去に屬する。平地が無いので、海岸から山手にかけて、急な斜面に、狭い街路や家が、ごちゃ／＼と、所狭く立ち並んで居る。その街道が、悉く敷石され居ることも、日本では珍らしい事で、我々には、何となく、オランダ船やスペイン船が盛に往來した古い昔のことなどが聯想せられる。その他、そこら歩いて居る人々の顔なども、妙に垢抜けがして居て柔かい感じであり、一般の町の空氣にも、しつとりとした奥床しさがあつて、古い文化の臭ひがたゞよつて居る。長崎は私の住地からは、あまり遠くないので、何時でも行けると思つて、つい／＼、私は一度しか、此所に來た事はないので、それも、ほんの通りすがりであつたのだが、最初の印象は、今でもはつきりと頭の中にあつて、靜かな町の氣分は、それを取り巻く青い山や、鏡の様な入江の景色など、共に、なつかしい、嬉しい思ひ出となつて残つて居る。長崎は、日本でも最も景色のよい所の一つである。——背景が日本畫風に畫かれてあることが、全體の效果に迄大きな功獻をして居ることは、云ふ迄もあるまい。

二幕三幕の蝶々夫人の部屋の景色も、大體に於て、日本の氣分を出すことに成功して居る。殊に、二幕より三幕への移り變りの所で

蝶々夫人が、夜通し彼れの來るのを待ち盡くすあたりの氣分がたまらなくいい。歌劇の全體としての進行から云つても、こゝらが、恐らくその頂點であるのであらう。三幕目の幕が開いて、舞臺に、朝らしい光りが輝き始めても、彼女はまだ、障子の側に、身動きもしていないで、立つて居る。——障子に穴をあけて外をのぞくことは、我々の間では、堪えてはい、いやしい行爲になつて居るが、劇としての取扱ひ上から云つても、又歐洲人の考へ方から見ても、此所迄來ることに、我々は充分の理解を持ち得る。本當の蝶々夫人は、恐らく障子を締め切つて、部屋の中に坐つて、物思ひに沈んで、獨り夜をあかしたであらう。自殺の仕方も、實際とは、やゝ異なつて居る實際には、部屋の真中に端坐し、曲げられたる兩脚を帯でしつかりとくゞり合はせて、苦悶しても兩脚が開かない様にし、然る後に、喉を短刀で突き指すのである。腹切りとは違つて、女の自殺の場合には、決して腹部を切ることはしない——しかし、そんな事はどうでもよい。要は全體としての劇的效果の上にある。

全體を通じて、音楽に、頻繁に日本俗謡の旋律が出て來るのは、大いに我々の注意を引くが、その他に、音楽の上に特別に感じたことはない。實際、この歌劇の重點は、音楽の

上よりは、寧ろ劇的内容の上にある様に思はれてならない。子役の扱ひなど、御婦人方を泣かしむるに充分である。又あらゆる環境の人々が、蝶々夫人から離れて行くあたりの、舞臺上の取り扱ひも、簡單ではあるが、手きびしく、効果的である。亞米利加領事の、終始落ち付いた、物事に理解のある、人情たつぶりの態度には、芝居事ながら、充分の同感が持てる。——内容と云へば、藝術品たる劇の内容を、實際の歴史的事件に當てはめて考へることは不當かも知れないが、しかし乍らこうした事件は、明治初年には、多々あつた事と思ふ。それは凡そ、一つの先進民族が、他の後進民族に接する場合に、極めて普通に起り得ることだからである。我々は、この劇を見て、**「彼れ」**リンカトンの行爲を攻撃するほど野暮ではない。とは云ふものの、蝶々夫人の、武士道的行爲に對して、多少の國民的誇りを感じないでもないのである。武士道——それは道徳の一つの形式として、現代の生活様式と、あまりに懸け離れて居る。唯しかし乍ら、少くとも武士道の精神そのものに至つては、現代に於ても、尙ほ條に存在し得るものと、私は考へる。そして、私はそれが實際今日に於ても、尙ほ何所かの隅に、多少なりとも、残つて居るであらうことを、期待して止まないものである。

## 蝶々夫人の梗概

### 第一幕

長崎港外に碇泊せる亞米利加軍艦の海軍中尉リンカトンは、彼れの、この地に於ける滞在を、日本娘との、假りの結婚によつて、樂しくしようと考へる。彼れの目に止まつたのが、茶屋の娘、蝶々さんである。長崎駐在のアメリカ領事は、事の悲劇に終る可きことを豫想して、リンカトンに、輕々しく舉動すべきでないことを忠告するが、彼れは無頓着に彼女と結婚して仕舞ふ。しかし乍ら、此の結婚は、彼女にとつては、決死的覺悟の結果である。これがために彼の女は、あらゆる舊來の信仰を放棄し、習慣を破り、凡べての親類縁者から見棄てられる。今や彼女が信頼して彼の女の全部を委ねるものは、廣い世界に唯彼れ一人である。

### 第二幕

リンカトンが去つてから、三年の月日は過ぎた。凡べての人々は、彼れが最早、歸つて來ないであらうことを、知つて居る。獨り彼の女は、固く彼れを信じて、その間に出來た子供を撫して、彼れの再來を待ちつくして居る。大名、山鳥侯(變な名前だ)が彼女に申

し込むのを、彼の女は振り向きもしない領事が、リンカトンからの手紙を持つて來て、彼れが間も無く來ることを、彼の女に告げる。但し、彼れは、既に、アメリカ女と結婚して二人で來るのである。領事は、この事をも彼の女に告げて、何とかして、事を未然に防がうと考へて居たのだが、彼の女が彼れの來報を聞いて、狂氣の様に飛び立つのを見ては、最早それを云ふことが出來ない。彼れの船が長崎に入港すると云ふ時、彼女は化粧し、盛裝し、子供にも綺麗な着物を着せ、部屋を飾つて、夜通し、彼れの來るのを待ちわびる。

### 第三幕

朝である。リンカトンと、彼れの妻ケーテと、領事が、蝶々さんの部屋に、彼女が丁度子供と共に奥へ引つ込んだあとへは入つて來る。リンカトンは、彼の女の部屋を再び見るや否や、彼れの過去の輕はづみに對するひどい悔悟を感じて、彼の女に面と向つて會うだけの勇氣を失ひ、子供をこちらに呉れる様に彼の女に頼むことを、妻ケーテに云ひ残して自分は部屋から去つて行く。蝶々さんは無論この申込みを一旦拒絶する。人々が去つて、彼の女が一人部屋に残された時、彼の女は自害する。

(ブツチイニ作)







編輯後記

六月は東西松竹合併記念興行で關西各座は一齊に三十一日華々しく初日を出しましたが、中座の梅幸羽左衛門幸四郎友右衛門の東京巨頭揃ひと、大阪の長三郎を加えた新陣容始め、浪花座家庭劇が久々歸演、角座は新聲劇の更生陣に京南座の左團次、神戸松竹劇の河合、喜多村合同等々、新緑六月の關西劇壇は近年珍しい盛陳です。

特輯とした、海外消息「漫談歐米の旅」蝶々夫人を観るの二篇……前者は筒井氏が一年餘の面白い歐米紀行記、後者は、伯林在住の一名氏より遙々寄稿されたものです。

東京、名古屋、神戸、京都を始め各地の歡樂街紹介記事は、本誌が新しく試みた事ですが、東京より寺井龍男、小生夢坊の兩氏より寄せられました。

誌面の都合で寺井氏の「淺草を語る」を本誌に掲載し小生氏のは次號に譲つた事を、筆者及び讀者にお詫びいたします。

映畫欄は都合によつて、本號は休む事にいたしました。そのかはりの綺堂、華水兩先生の左團次一座に關する御養稿及び桂田曉香氏の京都よりは、前記東京淺草便りと共に、東西京の劇壇の横顔を語るものとして、映畫欄以上に誌上を飾るものと思ひます。

大橋君が、突然に旅に出たので、本號は、また私か久しぶりに編輯事務をとりました。諸先生始め讀者諸君に久々のお目見得ですが、あまりお目見得榮えのしなかつた事をお詫びして攔筆いたします。

住田冬和

昭和六年六月一日發行

月刊「道頓堀」第六年 第五十七輯

- ◇ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。
- ◇ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
- ◇ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社  
大阪市北區中之島三丁目  
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵錢五厘)

昭和六年五月卅一日印刷  
昭和六年六月二日發行  
大阪市南區久左衛門町八番地  
發行所 松竹土地建物興業株式會社  
編輯兼 鳥江 鎮也  
大阪市東區鶴橋南之町一丁目  
印刷所 北島竹次郎  
大阪市東區鶴橋南之町一丁目  
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地  
發行所 松竹土地建物興業株式會社  
道頓堀編輯部  
電話(六六四〇番) 六六六五番

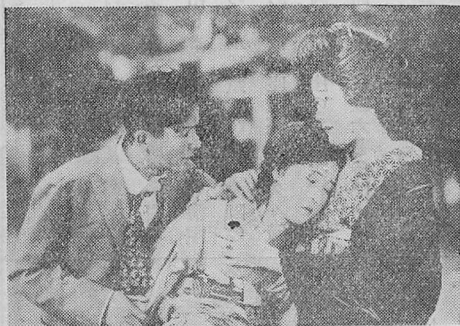
嘆きの都 (主題歌)

時雨音羽作詞 佐々紅華作曲

コロムビアレコード吹込

- 一 花をたづねて  
花にとげあり  
おさななじみの  
はるばる来れば  
嘆きの都  
夢なつかしや
- 二 空は澄めども  
姿いとしや  
胸のなやみと  
地はかじやけど  
唄はぬ人よ  
どなたが知らう  
はるばる来れば  
嘆きの都  
唄なつかしや
- 三 君をたづねて  
君にとげあり  
おさななじみの  
はるばる来れば  
嘆きの都  
唄なつかしや
- 四 ドラム打て打て  
フリユートならせ  
涙をかくせ  
春が来る来る  
情の小窓

婦人倶楽部連載  
中村武夫原作



|| 帝キネ現代劇部超特作 ||

曾根純三監督

三村伸太郎脚色  
三木稔撮影

嘆きの都

森 静子 主演

歌川八重子 水原玲子 徳川良子 杉川良子 津村狂児 牧村英勝 小宮一英 高島一登 生方一平  
星 英 中村 かん 京 浅野 節 岬 洋 川 芳 隆 前 田 英 子 間 田 英 子 高 倉 悦 子 日 憂 高 枝

の金掛限有に爲の族家御

終身保険



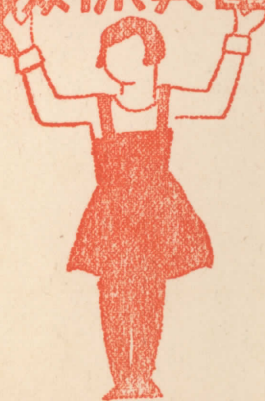
にめたの後老

養老保険



に費育教

蓄資保険



日本生命

目丁四橋今區東市阪大

載連部  
作原夫



生  
一  
一

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和六年五月卅一日發行  
昭和六年六月一日印刷

家庭一品

# クラボ煉歯磨



家庭一品

クラボ煉歯磨

中山太陽堂謹製

煉大正  
煉中 價  
煉大 廿  
粉大 十  
          錢  
          錢

「道頓堀」第五十七號 第六年六月號

一部金參拾錢